

修道

No. 77

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園(中・高)同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241-8291 FAX(082)249-0870
TEL(082)241-6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp



2011年度(中・高)同窓大会

目次

同窓会ニュース

- 大田前会長を偲んで …… 高木 一之 ……1774
- 修道同窓会発足100年記念事業について… 貫名 賢 ……1776
- 平成23年度修道学園(中・高)同窓大会を終えて… 越智 基匡 ……1781
- 100周年記念ゴルフ大会について… 大方幸一郎 ……1783

同期会報告

- 企画「修道ルネッサンス」で蘇った「修道魂」と新しい「母校への誇り」
諷訪 昭浩 ……1785
- 第25回修寿会報告 ……1786

特別寄稿

- 修道の歴史と同窓会 …… 畠 眞實 ……1787
- 実現まで追求 人生の夢 …… 天津 裕 ……1790
- 昭和11年(1936年)の風景 …… 増本 光雄 ……1792
- 新見剛士先生を偲ぶ …… 田中 真治 ……1795
- 中野先輩を偲んで …… 林 孝治 ……1796
- 縁の下の力もち …… 林 孝治 ……1803
- 苦悩と栄光の主将 …… 林 孝治 ……1808

- 校是「尊親敬師」について… 林 孝治 ……1811
- ねりんピック2011(ふれあい)熊本に出場して
大内 晟 ……1813
- ロイヤル・サッカー東西大会に出場して… 林 孝治 ……1816

学園だより

- 第64回 修道高等学校卒業式 ……1817

連合会ニュース

- 乃木希典將軍書簡の取得、寄贈… 近川 俊治 ……1818

支部だより

- 江能修友会 ……1819
- 関東支部 ……1819
- 広島修道歯科医会 ……1819
- 近畿支部 ……1819

事務局だより

- 同窓会募金活動について ……1819

計報

- ……1820

大田前会長を偲んで

修道学園（中・高）同窓会会長 高木 一之（高校10回）



大田さんは、前進あるのみの男っばい“快男児”でした。

大田さんが亡くなって、はや4ヶ月近くがたちます。まだまだ広島のため、修道学園のために頑張ってほしい人でした。

大田さんとの出会いは、今から15年前、広島経済同友会の委員会活動を通じてでした。修道の同窓（大田さんは高校11回卒、私は10回卒。1級違いとはいえ、生まれは同じ昭和15年）ということもあって、最初から遠慮なく話せる間柄になりました。

こうした大田さんとの間柄で、特にご縁の深かった経済同友会、そして修道学園常務理事会、同窓会を通じての思い出を書いてみたいと思います。

経済同友会は基本的には“提言団体”という位置づけでありましたが、大田さんは代表幹事（平成13年度から16年度）に就任するとすぐに、提言するだけでなく“行動・実践する”経済同友会にしようと、大方向転換をされ、自ら率先垂範、そして数々の実績を残されました。

今や、それが広島経済同友会の新しい伝統となり、自由闊達な、行動する経済団体に変身しております。

また、修道学園常務理事会でも、単刀直入、思い切っ

た発言、示唆に富んだ発言をされ、それが学校経営にも大いに役立ったと思います。

同窓会会長としても、同窓会会員名簿が個人情報保護の観点から未更新のままとなっておりましたが、会長の英断により平成22年、9年振りに発行され、卒業生から大変喜ばれました。（中村靖富満 一高校30回卒一名簿委員長が尽力）

さらに、同窓会設立100周年（明治44年8月10日設立）を迎えるにあたっての記念大会、記念事業をどうするか、大田さんを中心に同窓会正副会長会で大いに議論しました。特に大田さんが注力されたのが“修道学問所蔵”（仮称）の募金でありました。議論を進めている最中に病魔に冒され、100周年記念のことを気にされながら同窓会長を辞任されました。（平成23年3月。会長代理の私が急遽会長に就任）

責任感の強い大田さんは、募金活動のことを随分心配され、亡くなる1ヶ月余り前の同窓会募金委員会にも出席され、いろいろアドバイスをいただきました。体調不良の中、その精神的な強さに圧倒される思いでした。

大田さんは“修道大好き人間”であり、学園や同窓会のお役目を大変光栄に思っておられました。それが

けに最後の最後まで気かけられたのだと思います。

いろいろ書きましたが、大田さんは、組織の中で育った人とは思えない豪速球派のトップでした。

芯のぶれない強さ、厳しさの中に優しさ、気配りがあり、またすべてを水に流してしまうような素晴らしい笑顔がありました。まさに肚のすわった“快男児”でした。

私も何度か、公私にわたって相談をもちかけましたが、決断も早く、明快、しかもとても面倒見のいい方でした。

本当に残念でなりません。寂しい思いです。

こんな男っばい逸材を産んだのは、天性の資質に加え、人格が形成される青少年期に修道で学んだおかげではないか -まさに“知徳併進”“質実剛健”をほうふつさせるような人物だったと思います。

すばらしい人柄、すばらしい笑顔を偲びつつ、筆をおきます。

《足跡》

広島電鉄株式会社入社	1963年3月
" 代表取締役社長就任	1996年4月
" 代表取締役会長就任	2010年6月
中国地方鉄道協会会長	
社団法人日本民営鉄道協会会長	
社団法人広島県バス協会会長	
公益社団法人日本バス協会副会長	
広島商工会議所会頭	
日本商工会議所副会頭	
広島県経済同友会筆頭代表幹事	
学校法人修道学園理事	
修道学園(中・高)同窓会会長	
旭日中綬章受章	



修道同窓会発足100年記念事業について

100年記念修道中高同窓大会 担当副会長 貴名 賢 (高校14回)

100年記念事業として3つのテーマを設定して、多くの関係者のご協力を頂いて実行しました。

①同窓会組織の活性化

②設立100年記念同窓大会

③100年記念「広島城土蔵移築復元・寄付事業」

これらのテーマはそれぞれ重要であり多くの内容を含んでおりました。修道歴史研究会の皆様・同窓大会誌広告協賛・大会会員券販売・当日参加でご協力いただいた同窓生の皆様、修道同窓会の役員の皆様や修道中高校の校長先生をはじめ教職員の皆様にお世話になりました。時系列に沿って報告します。

①同窓大会の準備

各種の「声かけ運動」を実施し、同窓会関係者間の連携強化に繋がったと思います。

55回生の活躍

代表者越智君を中心に情報ツールを効率的に利用して多くの活動量をこなしました。

55回生は、2つのテーマを意識して見事に「歴史の1ページ」を飾りました。

・同期会をまとめて組織する。1人ではなくみんなで活動する。

・100周年記念同窓大会に55回の思いを結集して挑戦する。

「5」のつく会の活躍

熱心に参加していただきありがとうございました。

幹事・評議員登録されていない会員も積極的に参加していただきました。

若い世代の結束と協力

廣谷・中村・大方副会長をはじめ幹事・評議員の皆様には、次の100年に向かう体制作り。

若者世代大量参加プログラムを見事に実行していただきありがとうございました。

広告協賛及び大会会員券の販売に対し多くの会員の皆様にご協力をいただきありがとうございました。

*同窓大会の当日プログラム

②ホームカミングデー

(修道学園南千田町キャンパスにおいて)

生徒のクラブ活動状況やプラスバンドの演奏等の見学は台風で生徒は登校できなかったため中止となりました。

修道所蔵の古文書の閲覧

浅野藩校時代の教科書をはじめ貴重な所蔵品を閲覧することができ修道の歴史の重みを味わうことができました。

③「修道の目指すもの」と題して・

田原俊典氏(修道中学校高等学校校長)の講演
十竹ホールでの講演会は、聴取者の目もハートも釘付けにしました。現場をよく見て、生徒や指導教官の実態を把握し、校長としての夢を実現すべく具体的な対策を打ちながらの豊富な体験に基づいたお話しは同窓生の心に響き将来に大きな期待を持たせるものでした。明日に向かってのびのび活動している生徒たちの姿から、実現性の高い「修道の目指すもの」を痛快にお話しいただきました。

=修道中高校舎からリーガロイヤルホテルへ移動=

④修道中高同窓会本部・支部役員懇談会及び

同窓会幹事会・評議員会の合同会議

情報を共有するという視点から、下記の2つの会議を合同で開催させていただきました。

・本部役員及び地域・職域支部役員との交流会
(地域支部)

関東支部・近畿支部・九修会・東部修道会・修北会・江能修道会

(職域支部)

修道医会・修道歯科医会・広島市修道会

・幹事会・評議員会合同会議

100周年記念事業及び募金計画(3000万円)の審議承認

⑤記念講演会「修道の歴史と同窓会」温故知新

「修道学園の歴史と同窓会」と題して、畠 眞實氏に講演をしていただきました。

学園に寄贈されました「山田十竹先生の膨大な歴史資料」の整理と研究そして報告書の作成という地道な活動を完全なボランティアで実施し、「山田十竹ものがたり」を編纂されました。その貴重な資料を参加者に配布し内容についてご講演していただきました。内容的には「修道の根源について」丁寧に話していただき、多くの同窓生が正に「修道の歴史」を実感することができました。畠先生をはじめ修道学園史研究会の皆様にご協力の成果発表の場を提供することができました。

講師 畠 眞實氏（修道中学校高等学校 元校長
修道学園史研究会主催 高校7回卒）

修道学園史研究会

畠 眞實氏（高校7回卒） 修道中学校高等学校 元校長
仲井正美氏（修道大学卒） 修道中学校高等学校 元事務長経験者
木村正勝氏（高校13回卒） 修道中学校高等学校 元事務長経験者
田中佳樹氏（修道大学卒） 修道中学校高等学校 元事務長経験者
近川俊治氏（修道大学卒） 現 修道中学校高等学校 事務長

⑥同窓大会の開催

当日は台風襲来という悪条件にもかかわらず、予定通りに運営することができました。

55回生の皆さんがリーダーの越智君を中心に周到に準備し莫大な作業量をこなし、多くの先輩に面談し、100周年記念大会というプレッシャーをはねのけて、よく頑張りました。種々のアイデアと工夫を凝らした運営は広告協賛や会員権の販売や当日参加でご協力いただいた同窓生の皆様に快く受け入れていただいたものと思います。

この大会の特徴

当日参加者の大幅な増加を達成できました。（100周年記念大会のおかげでもあります）

同窓生656名来賓72名計728名の参加者を記録しました。

旧中卒業の3名

- 30回（91歳）森信 毅 氏
- 37回（84歳）河本 武彦 氏
- 38回（83歳）萬城 進 氏

をはじめ、各卒業回数からもれなく、幅広い年代の会員の参加をいただきました。旧中から高校29回までの参加者と30回から61回までの参加者がほぼ同数の結果になりました。「5」のつく会から平均で20名相当の参加をいただきました。関東支部の林会長をはじめ、近畿支部・九州支部・広島県内地域支部・職域支部から支部長の出席をいただきました。廣谷・中村・大方副会長を中心に進めていただいた、若者世代大量参加プログラムも若年層の参加に功を奏しました。詳細は別表1を参照ください

大会配布物について

55回生のアイデアのストラップが大変好評であったと思います。同窓会誌「修道」についても多くの同

窓生の投稿を頂いて内容が豊富になりました。また、同窓会の歴史については、現在修道中高の図書館にある資料を調べておおよざっぱにまとめました。

プログラムについて

田原校長先生と若い卒業生のコント風のショーはアイデアに満ちた楽しいものでした。

全員着席について

落ち着いた雰囲気が出て良かったと思います。

⑦同窓会の歴史のまとめ（概要年表）

同窓会誌「修道」76号（2011年9月3日配布済み）で学園の歴史と同窓会の歴史を重ね合わせた年表（概要）を作成しました。

図書館にある同窓会関係資料は興味深いものがありますが残念ながら欠番のものも多く、収集整理することも必要です。同窓会会員の私有物で眠っている資料があれば収集整理できるとよいと思われます。修道は多くの危機を乗り越えて発展を続けていますが、常に同窓生は同窓会としても個人としても母校修道のために、熱心で粘り強い支援を続けています。

100周年に当たり過去の歴史に学び今からを考える良い機会となりました。同窓会の視点から、いくつかのポイントを紹介させていただきます。別表2を参照ください。

⑧100周年記念「広島城土蔵移築復元・寄付事業」の実施

「広島城土蔵移築復元事業」が修道学園評議員会・理事会で決定されました。修道学園（中・高）同窓会として、「同窓会設立100周年記念事業」として、「広島城土蔵移築復元のための寄付事業」を展開することになりました。同窓大会直前の幹事・評議員会で募金計画を承認いただき現在進行中です。復元のための工事は現在準備段階です。

⑨同窓会運営の課題

- ・同窓会名簿の継続発行（5年に1回）
- ・同窓会役員会の活性化と支部（地域・職域）組織との連携
- ・同窓会報の在り方・情報交換としてのホームページ改善
- ・同窓会同期会及び会員情報の収集・交流
- ・同窓会歴史資料の収集
- ・修道学園発展への支援と協力への展望

別表2 同窓会誌「修道」76号記載より抜粋

	西暦(年)	和暦					
浅野藩藩校の時代	1725		藩校「講学所」			「講学館」に改称	
	1870	明治3年	修道館	学問所を八丁堀に移す			
	1871	明治4年	休学	鹿藩置県			
浅野家の私学の時代	1878	明治10年	浅野学校として再興				
	1881	明治14年	山田養吉、修道学校に改称				
			東京海軍兵学校から山田養吉を招聘校務一切を委任(6年制12級)				
山田養吉の私学の時代	1886	明治19年	山田養吉、浅野家から修道学校を継承し器物書籍等の下付を受ける				
			苦難の時代				
	1901	明治34年	8月26日 山田養吉逝去				
佐藤正・水山烈による継承・私学設立準備	1901	明治34年					
	～	～					
	1905	明治38年					
財団法人私立修道中学校	1905	明治38年	4月28日	総理：佐藤 正、同設立認可財団法人私立修道中学校となる。			
	1907	明治40年		水山 烈、竹屋校舎落成・以降明治43年7月まで拡張工事			
	1908	明治41年		水山 烈、琢掌会発足 会員：生徒、特別会員：教職員、賛助会員：同窓生			
			9月30日	修道第1号(琢掌会会報)発行			
	1911	明治44年	8月10日	修道中学校同窓会発会式			
			10月22日		竹屋校舎開校式・新築落成式		
	1917	大正6年	6月22日	水山 烈逝去・学校葬			
	1920	大正9年		理事長 佐藤 正逝去			
	1922	大正11年			千田町へ校舎移転を決定		
	1923	大正12年			加藤友三郎内閣総理大臣就任		
					(山田養吉門下生で明治44年1月当時修道学校同窓生)		
	1926	昭和元年		千田町へ移転完了 寄宿舎移転(267坪：76人在舎)			
				同窓生・生徒父兄によって講堂寄付			
	1927	昭和2年		校内プール新築工事竣工			
	1929	昭和4年		秩父宮・同紀本校プールに來臨			
	1930	昭和5年		同窓会運営の校内売店開設			
	1931	昭和6年		浅野長勲・本校借用地9230坪を本校に寄付			
	1932	昭和7年	7月12日	・同窓大会(羽田別荘)(150名参加)			修中同窓会報第5号 名簿記載
	1934	昭和9年		各地同窓会支部の活動報告(大連・奉天・台湾・札幌・京浜・庄原他)			
	1936	昭和11年	8月2日	母校創立200年記念事業委員会発足			
				修道中学同窓会募金目標額：壹萬円(1口20円多口・1/2・1/4も可)			
	1937	昭和12年	11月14日	創立200周年記念式典			
	1939	昭和14年	4月	敬道館完成寄贈			
			7月2日	200周年記念募金事業終了報告 最終寄付金額：3萬6,856円			
				～原爆被害～			
	1945	昭和20年	8月6日	原爆被爆	原爆により建物の大部分が倒壊		
				～復興の開始～			
		9月15日	敬道館応急修理して授業開始				
		9月21日	死没者合同慰霊祭(校庭)				
			修道学校・修道第二中学校(夜間)授業開始				
			修道中学復興計画(1期～4期)				

	1946	昭和21年	1月31日	復興後援会発会式			
			2月12日	校舎新築起工			
				4月「校友会」発足			
				兩校舎平屋建て1棟288坪新築			
				慰霊碑建立(校庭)			
				復興のための地道で熱心な学校支援活動			
					同窓会	父兄	その他
				昭和20年	3,900	114,450	
				昭和21年	88,750	376,350	8,905
			昭和22年	63,100	620,100		
			昭和23年	5,420	1,488,850		
			小計	161,170	2,599,750	8,905	
			総計		2,769,825		
新制中学校・高等学校の時代							
1947	昭和22年			学制改革により新制中学校設置			
			5月13日	田中好一理事長就任：伴正雄専務理事就任			
				中学校舎平屋建て1棟294坪新築			
1948	昭和23年			新制修道高等学校設置			
				学校将来計画：文部省・学校設置基準適合			
1949	昭和24年	3月		新制修道高等学校第1回卒業式			
1951	昭和26年			学校法人修道学園に改組			(旧財団法人修道中学校廃止)
			11月23日	・復活同窓大会(旧中33)			
				昭和26年理事会で「同窓生世話人制：卒業後10年目担当」が決まる			
1957	昭和32年	11月23日		修道学園創始233年私学80年記念式挙行			
				修道学園史刊行(創立233年私学80年記念)			
1960	昭和35年			修道高校売店・食堂が同窓会運営になる			
1978	昭和53年			中高体育館建設募金事業：5000万			
1979	昭和54年			創始253年私学100年記念式典「記念学園史編集」			
1984	昭和59年			山田十竹先生胸像(第三代)同窓会が建立			
1994	平成6年	3月23日		同窓会組織改革：			
				中高・大学・短大・大学院の4つの同窓会と連合同窓会に改組			
1995	平成7年	5月23日					中高募金事業検討
1998	平成10年			中高部校舎整備基本構想(案)及び募金計画			
			7月31日	臨時中高部同窓会幹事会開催			
				修道中高募金事業計画決定			
				募金目標額の決定			3億5000万
				募金委員会の設立			評議員・幹事に募金委員を委嘱：募金委員会を設立
1999	平成11年	2月10日		募金委員会(合同)			
			4月1日	中学高校校舎棟起工式：第1期工事開始			
				募金活動開始			
2000	平成12年	7月19日		新中学校校舎供用開始			
				旧中学校校舎解体開始 オヒキコウモリ物語			
				特別教室棟(RC7F：5617㎡)着工(H12/7～H13/7)			
2001	平成13年	7月		特別教室完成			
				高等学校校舎棟(RC5F：3351㎡)着工(H13/7～H14/7)			
2002	平成14年	7月		高等学校校舎完成			
				武道館(RC2F：1272㎡)着工(H14/7～H15/3)			
2003	平成15年	3月		武道館(敬道館)完成			
				本館3F改修工事			
			4月1日	敬道館供用開始式			
			9月	本館3F改修工事			
2004	平成16年	3月31日		募金活動終結			3億9122万2691円達成
2006	平成18年			除幕式平山画伯壁画			
2008	平成20年			本館耐震化・及び改修工事			
2010	平成22年			新体育館完成			竣工

同窓会ニュース

平成23年度修道学園（中・高）同窓大会を終えて

平成23年度同窓大会代表世話人 越智基匡（高校55回）

○はじめに

平成23年度修道学園（中・高）同窓大会にあたり、先輩方、その他多くの関係者のみなさま方のご協力を賜り、無事に終えることが出来ましたことを改めてお礼申し上げます。

今年は、過去最大となる700名のご来場をいただいたものの、従来の立席スタイルから着席（テーブルをバッジの色ごとに分けた）スタイルに変更したため、「ゆっくり話せて盛り上がった」、「同じバッジの卒業生と学年を越えて話せた」など嬉しいお声をいただきました。

同窓大会当日に至るまでを、写真を交えて振り返ってみたいと思います。

○平成22年9月

平成22年度の同窓大会に出席し、54回卒の先輩方の運営を見学させていただきました。54回卒の先輩方に引き継ぎご挨拶をさせていただきましたが、この時、これから起こる様々な出来事について想像すらできていませんでした。

○平成23年1月

新年2日、先輩方の同期会にお伺いし、ご挨拶させていただきました。

また、同日、高校卒業後初めてとなる55回卒全体での同期会を行いました。主任の湯川先生、上田先生にもお越しいただき、花を添えていただきました。

同期がそれぞれ別の道に進んでいることに加え、結婚した者やパパになった者もあり、つもる話で盛り上がり、あっという間に時間が経ってしまいました。この日、予想を超える出席者、その数100名越えから「これだけ集まってくれたら今年の運営は楽だ」とぬか喜び・・・。

○4月

「5のつく会」を開催し、ご出席いただいた5, 15, 25, 35, 45回の先輩方との交流ができました。



○7月

ここ半年間、同窓大会の仕事に全力投球していたせいか、ダウンしてしまい入院生活へ。

これを境に、動けない自分に代わり、運営スタッフのみんなが本気になり、一気に準備が進みだしました。

○8月

お盆に再び同期会を行いました。集まった同期に対して、「同窓大会を成功させたい。みんなの力を貸して欲しい」と熱く語る運営スタッフのみんな。この姿に勇気づけられたのは、今だから言えます。



○9月

同窓大会当日、数日前まで当日の運営スタッフ不足を心配していたのが嘘のように各地から40人以上が集まり、ピシッとまとまり先輩方をお迎えできました。

大きなトラブルもなく、無事に大会終了。「見よや修道魂を！」。



○おわりに

重い責任とプレッシャーから何度も負けそうになりましたが、無事に役目を終えたことへの達成感、喜びや感動、そして、これまで支えていただいたみなさまへの感謝など、言葉では言い表せない気持ちでいっぱいです。



昨年末の同期会での一枚

恥ずかしいことですが、修道の良さを今更ながら実感しております。

この一年で一番感じたことは、同期が「友達」から「仲間」になったことです。

また、今回の100周年の同窓大会が「これでベストだったのか」、「もう少し別な形でもよかったのでは」と思い返すことはありますが、同窓大会にご出席いただいたみなさま方の笑顔やお褒めの言葉から「これでよかった」と思います。

私たちの運営スタッフとしての役目は終わりましたが、修道学園の卒業生としての役目はまだ終わっていません。むしろ始まったばかりだと思います。この一年を通じて、私たちは先輩方から貴重な経験をさせていただきました。次の運営スタッフである56回卒の後輩達に、この経験や経験を通じて得た考え方などをしっかり引き継いでいくとともに、修道学園の卒業生の一員として、後輩のためにできる限りのことを行って参る所存です。

最後に、私一人では何も出来なかったはずですが、これまで支えてくださった先輩方、その他多くの関係者のみなさま方、また一緒に頑張ってくれた同期のみなさまに改めて感謝の意を表し、ご挨拶とさせていただきます。

本当にありがとうございました！

100周年記念ゴルフ大会について

修道学園（中・高）同窓副会長 大 方 幸一郎（高校38回）

平成23年11月6日（日）、三原市大和町のグリーンバズゴルフ倶楽部に於いて、修道学園（中・高）同窓会100周年記念ゴルフ大会「修道杯」を秋空のもと盛大に開催いたしました。

同窓会誕生100周年の記念行事の一つとして、9月の同窓大会でアナウンスさせていただきました。2ヶ月後の開催で当初はエントリーに一抹の不安を抱えておりましたが、その懸念は一時の杞憂に終わりました。お陰さまをもちまして、住田敏修道学園専務理事様、恩師として玉置勝之先生、吉田学先生、前事務長の田中佳樹様を含め、最年長は高校8回（74歳）から、平成24年の同窓大会世話人の56回（26歳）までの174名の方々にご参加いただきました。

午前8時より4か所からのショットガンスタートでコンペを開始。午前中は若干雨が残りましたが、徐々に天候も回復して一人のリタイヤもなく無事に競技を終了しました。その後は、クラブハウスにて全員参加での懇親会、表彰式となりました。はじめに貫名副会長のご挨拶をいただき、住田専務理事によるご発声で

乾杯の後に成績発表となりました。栄えある「修道杯」は、高校32回卒業の竹田芳弘さんの優勝となりました。おめでとうございます。最後は、大塚前同窓会副会長と同期8回有志の先輩による中締めでお開きとなりました。

また、当コンペ翌日に残念ながら逝去されました大田哲哉前同窓会会長には、開催にあたり格別のご配慮を賜りましたことをご報告申し上げます。

尚、準備から当日運営に至るまで下記の方々に行方委員会メンバーとしてご協力いただきました。改めてお礼申し上げます。

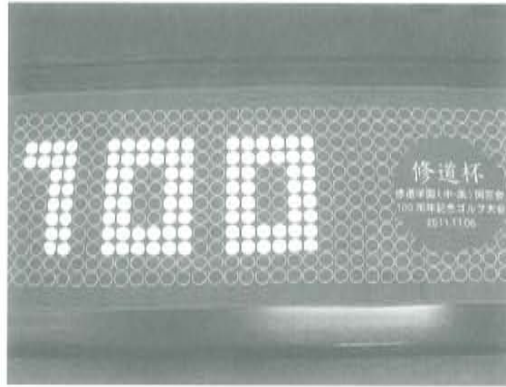
大成 浩二（高校38回） 筒井 直樹（高校38回）
西村 昌浩（高校39回） 井東 康三（高校40回）
小川 文象（記念品デザイン担当…高校50回）
越智 基匡（高校55回） 佐々木 雄（高校56回）
島本佳代子（同窓会事務局）

成績表（一部抜粋、敬称略）

順位	氏名	卒業回数	OUT	IN	GRS	HD	NET
優勝	竹田 芳弘	32回	40	44	84	14.4	69.6
準優勝	鷹橋 紀幸	35回	44	43	87	15.6	71.4
3位	山岡 裕幸	47回	49	44	93	21.6	71.4
4位	浜中 正三郎	10回	42	44	86	14.4	71.6
5位	山崎 尚史	16回	40	40	80	8.4	71.6
6位	丸岡 弘二	34回	42	44	86	14.4	71.6
7位	住田 有稔	8回	44	47	91	19.2	71.8
8位	山下 照男	20回	45	50	95	22.8	72.2
9位	平岩 正行	29回	45	50	95	22.8	72.2
10位	西山 修	20回	45	43	88	15.6	72.4
50位	児玉 明	38回	50	50	100	24.0	76.0
100位	伏見 光暁	44回	53	47	100	20.4	79.6
150位	西村 昌浩	39回	53	49	102	18.0	84.0
B B	西田 天次	41回	81	80	161	36.0	125.0
B M	横山 耕平	42回	82	81	163	36.0	127.0
ベスグロ	島谷 剛	10回	39	37	76		

各学年別参加者数

恩 師	2	8 回	4	20 回	16	30 回	4	36 回	1	42 回	5	48 回	1
事務局	1	9 回	11	22 回	4	32 回	4	37 回	1	43 回	2	49 回	1
		10 回	8	23 回	2	33 回	4	38 回	11	44 回	3	52 回	4
		14 回	4	24 回	16	34 回	4	39 回	16	46 回	3	53 回	4
		16 回	8	28 回	4	34 回	3	40 回	3	47 回	4	55 回	1
		18 回	1	29 回	4	35 回	2	41 回	3	48 回	4	56 回	1



参加賞：100周年マグカップ&タオル



懇親会及び表彰式



中締めは、大塚前同窓会副会長及び8回先輩有志



優勝の32回竹田方弘さん
贈呈は中村同窓会副会長より

同期会報告

企画「修道ルネッサンス」で蘇った「修道魂」と新しい「母校への誇り」

修道学園（中・高）同窓会評議員 諏訪 昭 浩（高校32回）

修道の絆というものはありがたいものである。在学中は全く意識できないが卒業してしばらくすると、時に励まされ、時に救われ、絆の存在をひしひしと感じるのだ。同期のつながりだけでなく、先輩、後輩との肩のこらない自然なつながりが、ことさらに意識的に維持しようと努力しなくても当たり前のように日常の一部となっている。

2010年のある夜も、いつものように安くて美味しいローカルな居酒屋に集まったのは、上は高校29回から下は54回まで、何とも幅広い年代の修道人であった。こういう集まりを月に1回行っているが、この夜は恩師風呂先生をお迎えしたこともあって、いつもになく修道の絆のありがたさについて熱く語り合った。そして生まれた企画が「修道ルネッサンス」であった。

卒業して初めて感じる修道の絆。その絆に感謝しつつ、今一度「修道魂」を心に蘇らせようという企画が「修道ルネッサンス」であった。卒業するとまず訪れることがない母校の教室を借りて恩師の授業を受けようというもので、「放課後」には校内の見学ツアーも企画した。

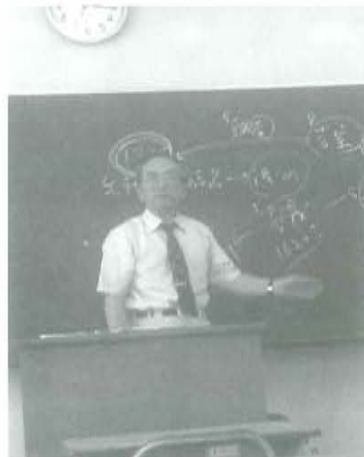
授業をお願いしたのは化学の藤沢先生と英語の風呂先生であった。人生を原子レベルで解説される藤沢先生の興味深いお話に続き、風呂先生お得意の「ハーン」の世界と修道の「敬」についてのお話をいただいた。母校での授業という、一度卒業したらまず味わうことができない経験に、当時の自分にタイムトリップしたような感覚を覚え、それによって老いた心身が若返るはずはないのであるが、奇跡的にそうなったかのような感覚をしばし楽しんだ。そして、長い間忘れていた荒削りの「修道魂」がもくろみ通り心に蘇り、修道とは自分にとってまさに精神的構造の原点に近いものだったということを感じることができた。

さて、「修道ルネッサンス」のもうひとつの企画は校内の見学であった。既にご退職された事務局の田中さんが大変ご尽力下さり、ツアーの順路設定や道順を示す案内板の設置など、事前にすばらしい準備をしていただいた。

私が中学に入学した頃はまだ旧講堂や木造の古い食堂などが現役で活躍していた時代であった。四時限が終わると同時に校舎から一斉に食堂めがけて走る生徒のお目当ては数量限定のランチ。この時だけは先輩も後輩もないその戦いに敗れた「敗北者」は仕方なくうどんそばの長い列に並ぶ。握りしめた数十円で列に沿う木製の手すりに何気なく傷を付けていくが、その傷は長年の間に深く深く掘り進められ、流れる川のようにになっていた。中学生の私はその「川の流れ」に修道の脈々と続く歴史を感じたものであった。高校に上がるとかろうじて現在の母校の雰囲気や漂わせる新しい体育館ができたのであるが、その体育館も今はなく現在のものに建てかわっている。

このような時代からは想像できないほど現在の母校は近代的に様変わりし、それはそれで嬉しいことではあるが、反面何とも言えない寂しさを覚えていたのである。その新しい母校を外からだけではなく内側も見学できたことは、少しだけ感じていた違和感を払拭できて大変に良い経験であった。時代は変わる。老いていく者のノスタルジーも大切であるが、これからの者のために常に発展し変化していくことはもっと大切である。新しい母校の見学によって母校に対する新たな誇りのようなものが生まれたような気がした。

このように、風呂先生、藤沢先生はじめ、修道関係者の皆様の多大なご協力で「修道ルネッサンス」は無事終了した。ご協力いただいた方々に心から感謝すると同時に、参加者全員で「修道魂」と新しい「母校への誇り」を共有できたことを本当にうれしく思う。



同 期 会 報 告

第25回修寿会報告

修道中学・高等学校の退職教職員の集まりである「修寿会」（会長・河野富士雄、会員80名）の第25回総会・懇親会が平成23年10月8日（土）、鯉城会館（広島県民文化センター内）で開かれ、15名の参加がありました。

開会に先立ち亡くなられた恩師諸先輩に黙祷を捧げました。

引き続きの懇親会では、修寿会に出て卒業生の名前を聞くのが、この会の楽しみでということひとしきり話に花が咲きました。また、元気で出かけ、出られることの幸せとともに一緒に居た人に会えるということは楽しいことであるし、生きているときに会いたい、との思いも語られておりました。

出席の皆さんからの近況報告には、平生の生活面で心がけて実行されていることやボランティア活動などの披露、健康面のお話、そして病気で入院した時の教え子の医師に大変お世話になって、修道の絆の尊さ、

有り難さを感じたと感慨深く話され、高齢になっても希望がある限り若い、と断じられてもおりました。やはり勤務した修道でのことが中心となりますが、退職後についてはおのおの個性あるスタイルで過ごされていることが伝わってきました。また、11月4日の創立記念日が休校日であるため、その前に中高生徒さん全員に配布されることになった「十竹先生物語」やそれに伴う関連行事についての紹介、作成に携わったOB職員から修道における十竹先生の意味などについての話もあり、短時間ではありましたが、和やかなひとときを過ごすことができました。

なお、今年度の新会員は、田中佳樹さんです。

そして、校歌を斉唱し、次回（平成24年10月13日《第2土曜日》）再会を期し、修道学園のますますの発展と会員の健勝を祈念し、恒例となっています万歳を三唱して、お開きとなりました。

修寿会幹事・木村正勝



木村 正勝	藤沢 洵	原本 博允	島 眞實	杓岐 俊平	田中 博司	中山 眞一	河野富士雄	吉崎富士雄	保澤 治	玉置 勝之	平尾 和子	内 恂	田中 佳樹	街道 武司
----------	---------	----------	---------	----------	----------	----------	-------	-------	---------	----------	----------	--------	----------	----------

修道の歴史と同窓会

修道学園史研究会 島 眞 實 (高校7回)

みなさまこんばんは。修道同窓会の発足100周年の記念事業の一環としてお話しさせていただくことを光栄に存じます。

本日、配付していただいた「十竹先生物語」は、修道中学・高校の生徒諸君に私学修道の開祖である山田養吉先生についてもっと知って貰いたいという思いで、修道学園史研究会が作成したものです。中学三年生くらいを対象として作っており、今年の創立記念式の時に配付していただく予定であります。本日は話し尽くせないところをこの冊子で補っていただければ幸いです。

「修道の歴史と同窓会」という大きなテーマを50分の時間内でお話しするのは、至難ですが、同窓大会の開始時刻までには何としても終了しなければならないということでもあります。

修道の歴史の概略とその中で同窓会が果たされた役割を簡略にお話ししたいと思えます。修道の歴史では、何故、修道が藩校の流れを汲んでいると言えるのか、同窓会については、開設の原点をポイントとして聞いていただければと思います。

修道の創立の起源は、享保10年(1725)、5代藩主浅野吉長公が白島の稽古屋敷内に講学所を設け、儒者の寺田臨川にこれを監督・指導するように命じられた時にあります。藩校の歴史がここに始まります。寺田臨川の胸像は修道の記念品室にあります。この講学所は9年後享保19年(1734)に「講学館」と改称されます。藩の財政的な理由で、寛保3年(1743)に閉鎖されます。

それから39年後、天明2年(1782)7代藩主浅野重晟公が城内三の丸に学問所を創設されました。その位置は、現在のRCC近くのNTT辺りにあたります。この学問所は重晟公の意向でただ「学問所」と呼ばれました。学問所の聖廟、つまり孔子を祀る所に重晟公直筆の「至聖先師孔子神位」の木主を掲げ、学問に励む者の精神的支柱として大切にされてきました。この木主は現在、修道に伝えられており、藩校の流れを汲んでいる重要な証しであります。

この学問所は明治3年(1870)城内の八丁馬場に移され、「修道館」と名付けられました。位置は現在の広島市中央図書館のあたりです。命名の由来は、中国の古典「中庸」の「性に率ふ、之を道と謂ひ、道を修める、之を教へと謂ふ」であります。

この修道館が明治4年(1871)、廃藩置県によって休

止となり、藩校の歴史はここで一応終わります。修道館のあった場所は明治5年(1872)土井百穀が買い取り、「遷喬舎」という塾を設立します。そこで外国人教師による英語教育も行われましたが、明治7年(1874)に廃止されます。この後、官立英語学校が開かれ、それを広島県が英語学校として引き継ぎ、ついで普通科教育を行う県立広島中学校へと推移します。それが県立広島尋常中学校と改められ、広島県立第一中学校、さらに国泰寺高等学校へと推移していきます。ここに公立学校の流れをみることができます。

一方、広島藩最後の藩主・浅野長勲公が明治11年(1878)に上流川の泉邸内に「浅野学校」を設立されます。長勲公は当時広島における教育機関が内容・施設ともに市民の要望を必ずしも満たすものではないとして、藩校・修道館の精神を受け継ぐべき学校として開設されたのです。修道館が休止後、7年が経過しています。

浅野学校の設立3年後、明治14年(1881)5月、長勲公は浅野学校を時代にふさわしい学校とするため学制改革に着手され、8月に石井樺堂校長以下教職員の職を解き、校名も修道学校と改め、11月、旧藩校の教授で、当時海軍兵学校の教官であった十竹先生を校長として抜擢し、校務一切を任せられました。

なぜ、長勲公は十竹先生を抜擢されたのでしょうか。一口で言うならば、先生の「人材育成」への強い思いによるのであります。先生は、30歳(文久3年・1863年)頃、世の中に尊王攘夷の思想が広まる中、藩の将来について藩の志士たちと、真剣に議論を交わされました。先生は藩主に国が今なすべきは人材の育成であるとたびたび進言されました。当時藩主浅野長訓公は藩の政治改革を目指し、先生を用達所詰という藩政府の要職につくよう命じられましたが、先生は「それは、わたしの任ではない。」と辞退され、学問所付の職に復帰されました。

先生の人材育成への思いを述べた「待賓説」という文章があります。これは先生が、明治元年(1868)江戸から国元広島への帰途、京都で戦いに出動のため駐屯していた、かつての同志から戦への参加を要請された時、彼らに示された文章です。大意は、料理人が持ち場を離れて宴席に出てお客の接待をしたのでは、料理人の役目は果たせず、客は不快な気持ちで帰ってしまう。

今、藩は外には戦争に携わり、内においては「人材の育成」を忘れていて、私には人材育成という本来の仕事があります、と言って要請を断ります。また別の文章において「人材は国を支える根幹である。もし人材がなければ国は衰退してしまう」とも述べておられます。このように人材育成への強い思いを持っておられました。このことが、藩校の精神を受け継ぎ、人材育成の大事にあたる人は、十竹先生を以て他にないと判断されたのだと思われまふ。この抜擢は、藩校修道館が休止となって10年後のことであり、これにより、藩校の精神が先生を介して現在の修道へとつながれたのだ、と私は理解しております。

「道徳を修むるを以て本校の主義とすべし。生徒の品行を正すべきこと」と長勲公から教学の指針が示され、先生は堅実に教育活動に励まれます。しかし、修道学校に危機が訪れます。それは明治19年(1886)浅野家が修道学校の経営から手を引かれるという事態でした。この年広島県は広島中学校を広島尋常中学校と改称しました。公立の学校にとって長勲公の私的な修道学校の存在がその支障になるというのが、理由であったようです。しかし、長勲公の修道学校への強い思いは、その後も多額の資金などの援助を続けられということにも伺えます。

この一大危機に、先生は修道学校が廃校になることに耐えがたく、浅野長勲公の筆になる「修道校」の額、および「至聖先師孔子神位」の木主、学校の器物・書籍などを浅野家から下付されて、八丁堀の自宅において独力で修道学校を引き継ぐ決意をされました。ここから私学修道の歩みが始まります。先生を私学修道開祖の恩人という所以であります。この時、先生の決断がなかったなら現在の修道は存在しなかったと言えるでしょう。

明治20年には校舎の建築に着手し、学校運営に励まれました。先生の晩年、明治30年(1897)頃は、国の政策により官公立の諸学校が次々と新設され、このことが、財政力の弱い私学には圧力となり、修道学校の勢いも衰えを見せ始めます。

そこで先生は有志に諮って海軍兵学校の予備校として新たな道を開く意向を示されました。その意向を受けて、卒業生たちは、明治33年(1900)1月、「修道学校同窓会」を組織しようと広く県内外の同窓生に呼びかけます。同意した者は200名に及び、大きな反響を得ます。このことは同窓会設立の先駆けとも言えるでしょう。先生は、「修道学校拡張趣意書」を作成し、実現のため日夜奔走されます。しかし、この年北清事変勃発、宇品港の被害などで、この動きは、一時中止になりました。この時期、広島は軍都としての様相を深め、物価の高騰などで学校の経営はさらに厳しさを増していきます。

明治33年(1900)12月、この打開策として、拡張委員の水山烈は協議の末、昼間は普通学の授業をやめ、漢学の授業のみを行い、夜間は修道夜学校を設置して中学課程の普通学科を教え、学校の経営を継続しました。これによって、何とか学校の危機を避けることができたのでした。

翌、明治34年(1901)8月26日、生涯を人材育成一筋に歩まれた先生は、水山烈を病床の枕辺に招いて後事を託して亡くなられました。校主山田養吉先生の逝去により昼間の漢学教授は自然廃止され、中学課程の普通学の夜間授業のみとなります。学校拡張委員は水山烈を校主に推し、十竹先生の思いを受け継ぎました。起死回生の策として夜学校を開校しますが、その4年間の経営は実に苦心の時代であり、同僚職員がよく協力し、献身的な教育活動が続けられ、その努力により世間に認められ、次第に隆盛となっていきます。このことが修道中学校設立の機運を生じさせます。

明治38年(1905)3月、かねての計画であった「中学を設立しよう」という修道学校拡張への努力が実り、水山烈を設立者として、10月に私立修道中学校設立が認可されました。従来の八丁堀の先生の家塾の跡に教室一棟を増築して授業を続けます。やがて入学生徒の増加により他に校地を求めることになって、竹屋町に校地・校舎移転の大事業がなされました。明治40年(1907)に竹屋校舎が落成し、43年(1910)まで増築拡張が続きまふ。

ところが、落成して間もない、明治44年(1911)の2月、火災が起り、教室二棟、講堂一棟が焼失しました。焼失した教室の復旧に加えて、武道場、仮講堂の建設がされ、4月の新学期からの授業には支障がありませんでした。因みに、その後、修道は昭和元年(1926)現在の南千田町に浅野家から無償で土地を譲られて、総合移転をし、現在に至っています。

ところで、本年度の同窓大会は同窓大会が発足100周年に当たる記念大会であります。修道中学校同窓会発会式は、明治44年(1911年)の8月10日に行われ、ここから今年で100年になります。発足のきっかけが、今申し上げた校舎の焼失という災難であったと思いません。地元有力者、同窓生、保護者の熱い思いによって校舎の復旧などがなされました。こうした支援によってこの年の10月に開校式・新築落成式に漕ぎ着けられました。この時の同窓生の働きが同窓会設立に大きな力となったのだと思われまふ。同窓会の創設は、「財団法人」「保護者会」と共に修道の維持・発展を支える力強い柱の確立でした。先に述べました修道学校拡張計画が学校の衰退を救うために立てられた時、同窓会結成への機運を生みまふ。それが校舎焼失という母校の危機を契機に結実したのだと思われまふ。ここに修道同窓会の出発点を見ることができまふ。同窓会規

則に「本会は会員相互の親睦を図り母校の発展に寄与するを以て目的とす」とあります。正にその趣旨に沿って母校の発展に尽力してこられました。

その具体例を簡略に挙げますと、昭和5年(1930)同窓会売店開設、昭和13年(1938)学校の200周年記念行事への協力、昭和20年(1945)8月6日の原爆被害への復興後援会が組織された時においても同窓生が大きな力となり、早い時期での授業再開がなされています。そして昭和26年(1951)2月修道学園が財団法人から学校法人に移行されます。この学校法人修道学園組織を承認するために同窓会の評議員・理事の選出が必要であり、そのことが、その年11月戦後の復活同窓大会の開催を促しました。この時選出された同窓会役員会において同窓大会の世話人制が決められ、卒業9年目に担当することになり、現在に及んでいます。

昭和53年(1978)には中高体育館等の建築資金を目的とする募金事業を立ち上げ、同窓会から5000万円が学校に寄付されました。そして平成11年(1999)11月から始められた中高校舎等の大改築においては募金委員会を設立し、4億円にも及ぶ巨額の資金援助がなされました。同窓会が学校を物心両面にわたって支援されてこられたことは、十竹先生胸像建設、平山画伯の陶

板画「希望の光・安芸の小富士」寄贈、生徒会全国大会出場支援など、まだまだ数多くございますが、時間の関係で割愛させていただきます。

同窓会の組織としては、昭和27年(1952)に修道短期大学、昭和35年に広島商科大学(現広島修道大学)が設置されたことで拡大していき、平成6年(1994)には、これらに大学院を含めたオール修道を包括して「修道学園同窓会連合」が設立されています。

山田養吉先生が明治19年(1880)、私学修道としての道を決意して歩み始められて後、今日に至るまで修道のたどってきた道のりは決して平坦なものではありませんでした。存亡の危機にも幾度か遭遇いたしました。しかし、その時々において同窓生・同窓会が大きな力となって学校を支えてきてくださったことは忘れてはなりません。今後、修道が私学として歩み続けていくためには学校と同窓会が相携えて発展していくことがこれまでも増して大切であると信じているのであります。ご清聴ありがとうございました。

*平成23年9月3日 広島リーガロイヤルホテルにおける修道学園同窓会主催講演



実現まで追求 人生の夢

前同窓会近畿支部会長 天津 裕 (高校7回)

修道中学に入学してすぐ、担任の先生から宿題の作文が出た。題は「将来の夢」。僕は新聞記者それも朝日新聞の記者、無理なら作家でもいい、と書いた。2年生になって近所に柔道の町道場ができた。その先生のカッコよさにあこがれ町道場の先生もいいな、どちらにするか半年あまり迷った。やっと結論がでた。「文武両道の達人」になればいいんだ、そうしよう。3年生の時、新見先生を指導者とする柔道部が復活、ためらうことなく入部した。かくして文武両道の達人という途方もない人生の夢に踏み出した。そのころ何かの本に「日本でのジャーナリストの登竜門は東大の社会学科」と書いてあるのをみつけた。「じゃ、東大の社会学科とやらに行こう」夢は途方もなくふくらんだ。

高校1年になり世界史や人文地理を学んだ。人生の夢が三つ加わった。①万里の長城をこの足で歩く②密林の中に忽然とあらわれた宮殿・アンコールワットをこの目で見る③大空をキャンバスに描いたオーロラを見る。この三つが僕の人生の夢として定着した。

東大には艱難辛苦の浪人の末、やっと滑り込んだ。体育実技にサッカーを選んだ。教授は竹腰重丸さん、日本の近代サッカーはクラマーが生み竹腰が育てたとうたわれたあの竹腰さん。当時は日本チームの監督もしていた。「なぜそんな大物が」という僕の疑問に上級生が「東大は学生自身も気づいていない才能も見出して伸ばす所だ」と教えてくれた。「すごい学校に来たものだ」と当時は素直に感動した。

実技の時間、浦和や湘南のユニフォームでサッカー靴をはいた連中がいた。僕はもちろんトレパンでズック靴。ある日、竹腰先生が「君、名前は何ていう」「天津です」。身長、体重、百メートル走など基礎的体力・運動能力と出身校などを記した体育カードをめくった竹腰先生「修道か、さすがだな」。「僕、サッカー部じゃありません」「わかってる」。夏休み帰省して修道に行ってこの話をした。「よくぞ母校の名誉を高めた」職員室にいた先生から口ぐちにほめられた。お世話になりっぱなしの修道にいささかの恩返しをした気分になった。

さて文武両道の柔道。本郷から近い水道橋の講道館によく通った。明治の神永さん、教育大の猪熊さん、日大の古賀さん日本柔道を代表する三人のほか醍醐、

大沢の両先生（お二人とも現十段）三船先生（当時十段）大きな図体と馬鹿力のヘーシング、彼らにまじってやる稽古は文句なしに質の高いものだったはずだが、私の腕はさっぱり上がらず、卒業後に名誉三段という不名誉なものをいただいた。

もう一方の文、これも質は駄目だったが意気は高かった。大学四年になると先輩が気にかけて下さる。「新聞記者になりたい？ だけど正力先輩や水野のとは駄目だぞ」「僕もそう思います」「やはり新聞は朝日か毎日だな」「はい」。こんな会話をある先輩とした数日後、毎日新聞主筆の高橋武雄先輩から電話「めしでも食おうか」。有楽町のレストランで「うちに来たいんだって」「いえ、朝日をねらっています」先輩の顔をつぶしている自覚はさすがにあった、が少年時代からの夢だ、他に言いようは無かった。

正力先輩とはもっとひどかった。正力先輩（柔道十段）が今の世界柔道連盟を作る準備作業を手伝った。ある日、正力さんに「僕、新聞記者になりたいのですが、読売には行きたくありません。朝日をねらっています。だけど、もし落ちたら日本テレビに拾っていただけませんか」。「いいよ」と引きうけてくださった。朝日へ合格した日さっそく報告にいくと「そうか」と一言だけ。朝日入社後聞いた話では実力2番の好成績だったという。

卒業して何がうれしかったとって「もうあのつらい柔道の稽古をしなくていいんだ」と思うほど楽しいことはなかった。それなのに柔術をはじめた。

朝日新聞に大東流という柔術が伝わっている。時の権力と対立することの多い朝日新聞は企業防衛の一環として守衛に柔術を習わせた。戦前の昭和初期のことだ。

柔術は柔道とどう違うんだ、とおっしゃる方に説明すると、柔術は昔、武士がやっていたもので、柔道と形の上での違いは投げ技がない。だって投げ飛ばすと、投げられた方は腰の刀を抜いて向かってくる。こちらでも刀で対戦だ。これでは柔術は刀での勝負の前座の役しかない。柔術は全て極め倒す、そして足で相手の腕を折る。僕の師匠がよく言った「足はどんな腕より大きくて長くて力がある。女の足だって並みの男の腕より強い」。その足で踏んづけて相手の腕を折るのが最も一般的だ。

僕は自分でも驚くほど柔術に向いていた。宗家・武田惣角からただ一人免許皆伝を許された久琢磨が師匠だが、久は自分の持っているものを全て僕に伝えようとした。昇進も順調。柔術も剣術もお茶やお花といった他の日本文化と同じように初伝、中伝、奥伝と進む。奥伝でお茶やお花は家元とか名取とかもらって一本立ちする。武道は師範代。しかし武道はこの上に秘伝、最後に免許皆伝。僕は秘伝だった時に本業の方でデスクになり、いかに努力しても両立は無理なので涙をのんで大東流をやめた。その夜、家に帰った師匠があまりに元気がないので娘さんが聞いたところ「天津がやめた」とポツンと言って以後誰にも大東流は教えなかったという。師匠の死後何年もたって娘さんからこの話を聞いた時、不覚にも目頭があつくなった。

武を絶って20年間、文一筋に生きた。局長に次ぐ局次長というまあまあ線のまで行って定年退職。さて、人に自信を持って教えられるものと言えば、大東流しかない気づいて道場を開き、インターネットで宣伝した。驚くほどの反響。聞くと武田惣角と久琢磨は少年アニメにもとりあげられた"有名人"。大東流秘伝を名乗れる人物は僕しかいないとわかった。内外とくに外国から弟子志望が引きも切らず。以後毎年海外に行く忙しさ。

昨春、思いもかけぬ肺炎で入院、一時は死も覚悟させられたベッドの上で人生の夢のうちただ一つ「オーロラを見る」だけは達成していないことに気付いた。退院後の夏「これが最後」と銘打った会をヘルシンキで開いた。「もう一度だけフィンランドには来る。オーロラ見物に」「先生、だったら今冬がチャンスです。11年に一度のオーロラ当たり年です」。

「先生一人では危ない、僕がついて行く」という弟子と二人あこがれのオーロラを見に正月早々日本を勇み発った。フィンランドへ入国の際、審査官が「キッテラに何しに行く」「オーロラ見物に」「キッテラでオーロラは見えない。本当の目的は何だ。」「キッテラは飛行機の最終空港、オーロラを見るのはそこからバスで70分も行ったハリニヴァ」と説明しようとしたとたん「天津先生！オーロラを見にいらっしやったのですね。

あなたのお顔をふたたび見られて幸福です」の叫び。見ると隣の席の審査官が主人にじゃれつく犬のように自分の席から身をのりだして僕に近づこうとしている。名前は知らないが弟子の一人。「お前か」「はい、私、自分の幸運に感謝します」。彼が一言、二言僕の審査官にささやくと、眼前の審査官の態度ががらりと変わり「失礼しました。どうぞお通り下さい」。胸張って堂々と入国した。幸先いいぞ、オーロラも歓迎してくれるはず。胸の鼓動はいやが上にも高まった。

最初の夜は真っ暗の夜空をただ見上げて過ごした。まだ三晩ある。次の夜、「そろそろ」の期待をこめて午前2時半までねばったけど、見えたのは星二つ。

三晩目、同行の弟子は疲れはてて眠りこけ、起こすのも可哀そうなので一人で外に出た。見渡すかぎり続く雪と氷、川が流れていてあちこちに立て札「危険氷が薄い」踏みぬくと凍死するという警告だ。空を見上げる。星はおろか月さえ見えない。北極の大雪原にただ一人いる孤独感がひしひしと身にせまる。話し相手もない。修道の校歌を口ずさんでみた。効果ゼロ。応援歌にした。出てくるのは美辞麗句ばかり。大自然の猛威の前には人間の作ったものなんか、から元気の突っ張りにもならないことを思い知らされた。

最後の夜、徹夜覚悟で夜空を見上げ続けたが午前4時前「もうやめよう」と部屋へ。

土地の人に聞くと、今年は異常に暖かく地上に水がある。その水が蒸発して空で雲になりオーロラを隠す。地上の温度が少なくともマイナス10度以下になり、水の蒸発が止まる二月上旬になれば空も晴れてオーロラが見える。来年は二月上旬にいらっしやいという。同行した弟子は「二月、三月に年休申請など出すとクビですよ」とあきらめ顔。「俺は来るぞ」とうそぶいたものの「危険な北極に一人はだめ」という妻の顔が浮かぶ。

帰途ヘルシンキ空港に二人の弟子が来て「僕たちがついて行きます。絶対に危険な目には会わせません。」「ありがとう。持つべきは弟子だ」。

やり抜くぞ人生の夢、実現まで！

完

特 別 寄 稿

『昭和11年（1936年）の風景』

増 本 光 雄（高校12回）



森山純爾氏
大正9年(1920年)7月30日生まれ

私は、昭和21年（1946年）猿猴橋の上をニュージーランド兵が整然と行進している写真を『広島市公文書館』発行の『あの日 あのころ ひろしま50年』という冊子の中に見つけた。なじかは知らねど、強く印象づけられて、その残像が長く残っていた。

その後、猿猴橋について、いろいろな資料を探しているうちに、市立図書館で借りてきた『目で見える広島市の100年』という写真集の中に現在の東広島市原村に演習に行く修道学園生の猿猴橋上の行進の様子が、このニュージーランド兵の行進とまったく同じ構図なのにびっくりした。その写真には昭和11年というキャプションがついていた。

おそらく、4年生か5年生であろうと推測して、「90歳以上の修道の先輩を探して、当時のお話を聞く必要があるな」と考えていた。

かといって、90歳以上の修道の先輩となると、とっさには思い当たらない。ほとんど亡くなっているか？ 足腰が立たなくなっているか？ ぼけて、昔のことは覚えていないというのが現実であろうと悲観的に考えていた。

平成23年（2011年）10月3日（月）に藤田正明参議院議長の秘書を長年務めておられた森山純爾先輩からの電話があった。

「増本君、君が複写してくれた僕が昭和天皇と一緒に写っている写真は持っていないかな？」

「それは、無いと思いますよ」

「それじゃあ、僕の家額に入った写真があるから、それを複写して、キャビネ版に5枚焼いてくれませんか」という依頼が来た。

私はバイクで己斐のフジハイツの森山さんの家を訪ねることになった。

全紙の写真が額に入って壁に飾られていた。

その写真は昭和天皇が戦争遺族の婦人に声をかけられている様子を写したもので、当時、読売新聞社の記者をされていた24歳の森山先輩が群衆の中にはっきりと写っているものであった。

全紙の額はもてあますので、写真だけ取り出して持って帰って複写することにした。

帰りがけに猿猴橋を行進している修道の生徒の写真の話をした。

「ところで、森山さんは、今、お幾つですか？」

「僕は、91歳だよ」

「それなら、昭和11年に原の演習場に行った憶えがありますか？」

「僕等は、行っったよ。あれは、5年生と4年生と3年生が行ったんよ」

「へー、3年生も行っったんですか？ そんなら、複写ができた時、修道の生徒が猿猴橋の上を行進している写真も持って来ますから、見て下さいよ」と言って帰りました。

あくる日に複写を終えて、再び森山さんの家を訪ねることになった。

複写を渡して、「それから、もう一つの用事ですが、この写真を見てください」と修道の生徒が猿猴橋の上を行進している写真を見せました。

森山さんはその写真を覗き込んで、「こりゃあ、僕が写っておるで、前から4人目に写っているのが、僕に間違いはない」とおっしゃいました。驚くべき偶然とつか？ 奇跡が起こったのでありました。

「この眼鏡をかけているのが、本当に森山さんなのですか？」

「うん、僕に間違いはない。こんな写真がよう残っったよのう！」

あまりの偶然に、森山さんの言葉が全然信用できないというのがその時の私の心境でありました。いかに元気で、しっかりしているとは言え、なにしろ、御年91歳であらせられる。この爺さん、目が悪くなっているのではないだろうか？ それとも、呆けたんではなからうか？ 伊達や酔狂でこんなことを調べているわけではない。若い者（70歳）をからかうにもほどがあるというのがこの時の私の偽らざる気持でありました。

ところが、森山さんは大きな天眼鏡を持ち出して、「僕のすぐ前を行進しているのが水泳部の湯浅君じゃ！」とか、「先頭を行進しているのは級長で、級長は将校じゃけえ、軍刀を前に突き出して行進するんよ」とか、また、昭和9年の軍事訓練の写真を見て、「この先頭を行進しているのは、東洋工業に行った松野君じゃ、

これは、軍事教員（在郷軍人）で、これが名前は忘れたが、確か、少佐で、これは軍曹（下士官）で、あだ名が『新兵』言うんよ・・・』と具体的な話が次から次に飛び出すので、私もようやく信じざるを得なくなってきたのである。

その写真は、当時、おそらく軍関係の資料として撮影されたものであろうが、5年生や4年生よりも3年生を撮った方がいたいけなく、訴求力があり、写真として、インパクトがあると考えたに違いない。3年生といえば、満で14歳である。初期の白虎隊が数えて15歳からであったから、ほぼ、同年代である。これが、本物の『三八銃』を肩に、前線に出ている後続の兵士として、橋の上を整然と行進しているのである。然れども、昭和11年である。まだまだ、それらの幼顔には悲愴感は無。遠足に出かける少年のように、なんとなく、その顔に愉しさが窺えるのである。

森山さんは昔のことも、昨日のこともよく覚えておられて、頭の方も確かであります。文章を読むときは裸眼であるし、耳もよく聞こえるのであります。さすがに、91歳ともなれば、背中が曲がっているし、心臓にはバイパスが通っていますが、いたって元気で、健康維持のために今でもプールで泳いでおられます。

さて、昔の中学生の写真の数枚お見せした後。

「森山さん、この写真に見覚えはありますか？ 柴橋の下流の京橋川から猿橋川が分かれる境目にあるデビの写真ですよ」と言って、小学生が群がって水泳をしている『台奥の鼻』通称『デビ』の写真をお見せしました。

「僕は小学生の時は荒神小学校で、大須賀町に住んでいたけれど、デビはよう知るとるよ」

森山さんは、荒神小学校の私の先輩でもあるのです。

「縮景園のところが、丁度、川の曲がり角になっていて、流れがぶつかって、急に流れが速うなって、渦を巻き、川の底が掘られて深うなっとったんよ。そこで、子供がよう溺れて死によった。それで河童がけつから手を突っ込んで肝を抜くんじゃと言われていたが、それは嘘じゃね。人間が溺れて死ぬと肛門が開くんじゃ。それを河童のせいにしたんじゃね」とのたまあった。

河童は人間の肝が好物で、それを尻から手を突っ込んで抜き出して食べるという凄惨な物語なのでありますが、言ってみれば、『危ない所には近づくな』という大人の子供に対する教訓なのである。

戦前も戦後すぐにはどこの学校にもプールというものはない、小中学生はみんな川とか海で泳いでいた。

広島は川はかなりの干満の差があり、時にはかなりの水流になるので、危険極まりない遊び場であった。

現在では、街中に有料プールもあり、たいいていの学校には自前のプールがあるので、昔ほどの危険性は無いが、それでも、何年かに1度くらい水難事故は起きる。

デビはもっぱら幟町小学校の公認の水泳区域で、大正橋下流は段原小学校の遊泳場所でした。深い所には赤い三角の旗が立てられ、材木を組んだ飛び込み台というか監視台も川の中に建てられていました。

荒神小学校の生徒はその両方の水泳区域に遠征するか、猿橋橋の上から飛び込んで遊んでいました。

というわけで、当時、夏休みの水難事故は絶えることがありませんでした。

さて、この昭和11年の森山先輩のお話というのが、私が求めていたものと余りにも奇遇に近いピンゴなので、今一度確認を取っておかなければ私の心にしっかりと収まらないもどかしさがあった。この胸のつかえを解消するために、森山先輩にお電話をして、今一度お会いして裏を取ることにした。時間をおいて、二度も同じ話を聞ければ確信が持てる。

平成23年(2011年)12月6日(火)の朝に電話して、森山先輩の所要での出先であるANAクラウンプラザホテル広島の1階ロビーで14時に待ち合わせることにした。

そこで、私が作成した4ページの文章と2Lに伸ばした複写写真5枚とA4のコピー資料5枚を森山先輩にご覧いただき、再度確認していただくことにした。

お話の内容は、前回と全く同じものであったので、私の胸のつかえは下りた。さらに、微細にわたって、私の質問に答えていただき、当時の修道中学の生徒の生き様も、思っていたことも、考えていたこともお聞きできて、大変有意義な1時間半の楽しい先輩後輩のお付き合いができた。

広島は不幸なことに、原子爆弾が投下されたために、昭和20年以前の歴史が消されてしまった。

決して、戦争を高揚するために、戦時中の歴史を掘り起こすのではなく、戦争というものを事実として深く認識しておくためにも戦争の歴史を記録しておかなければならないというのは、森山先輩と私の共通認識であった。

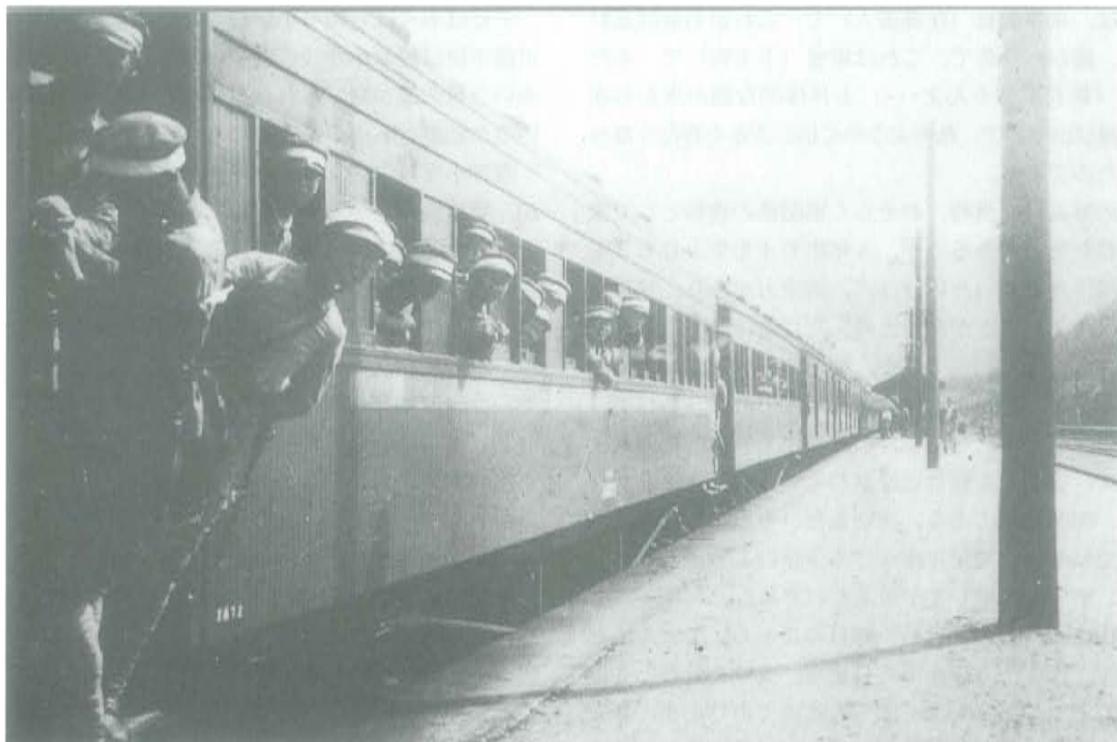
確かに、戦争というものは人類にとって『負の遺産』である。必然性があつての行為であろうとも『負の遺産』に変わりはない。

『勝てば官軍』と言いつわされてきたが、特攻隊の生みの親『大西滝次郎』は沖縄で割腹自殺、東条英機首相と文官である広田弘毅等は絞首刑。

立場を変えて、仮に、アメリカが敗戦国であれば、チェスター・ミニッツ太平洋艦隊司令長官はオアフ島で短銃自殺、ハリー・トルーマン大統領、ドワイト・アイゼンハワー元帥、ダグラス・マッカーサー司令官は揃って絞首刑。

というのが、順当な筋書きというものである。これが戦争というものである。そこには、勝敗があるのみで、決して、正義は無い。

2011年12月7日



瀬野駅にて（安芸区・昭和11年）
瀬野駅に停車中の列車の窓から身を乗り出しているのは、原村（現東広島市）へ演習に向かう修道中の生徒たち。



行進する修道中学生（南区・昭和11年）
靴音高く、広島駅へ向けて猿猴橋を通過中の白帽軍。原村（現東広島市）への演習に向かう。

特別寄稿

新見剛士先生を偲ぶ

修道中・高 保健体育科教諭 田中真治(高校28回)

私たちの恩師である、元修道高校教頭の新見剛士先生が、平成23年12月11日誤嚥性肺炎によりお亡くなりになりました。

8年前、「敬道館」として新道場が建築された時、柔道班道場開きでお会いしたのが最後になりました。その後は、娘さんと同居するなかで、静かに余生を送られていると聞いていましたが、突然の訃報に接し残念でなりません。



昭和24年

昭和20年8月6日、広島に原爆が投下され、戦争終結。新見先生は、その1年6ヶ月後、昭和22年4月1日から、昭和62年3月31日までの長きに渡り母校の教育に携わられました。

昭和24年、先生は、戦争により昭和15年から中断されていた臨海学校を復活させ、以後定年まで、常に遠泳の先頭を泳がれていました。

専門の柔道がGHQの占領政策により昭和25年まで禁止される間、サッカー班部長として、6回の全国優勝を成し遂げられたのは有名な話であります。

柔道復活後は、定年までの35年間柔道班の部長、監督として一貫して柔道班の指導にあたられ、中体連・高体連の要職をこなされる中、修道の選手(春木・大国・三本松)を中心とした年の広島チームで国体準優勝3回を成し遂げられました。将に、戦後の時代と

共に修道を創っていかれた先生でありました。

新見先生が口癖のように、「自分は、どこを切っても、金太郎飴のように修道じゃ。」と言われていたのを思い出します。修道の校風と言える、自由・自主の気風と文武両道の精神をもっておられる先生でした。



昭和41年

「生徒の自主性を重んじ、生徒ができるまで待ってくれる。」

「生徒に『やれば、できる』という気持ちを育ててくれる。」

「いつもニコニコされているが、なぜか怖かった。」

「麻雀も花札も、勝負事はなんでも強かった。」

存在感があり、やさしいいけれど、怖い。そんな先生でした。

常々「技は盗むものである。」「よく食べろ。大飯食いは労力を惜しまぬ人が多い。」と言われていました。我々は、新見先生に見守られるなかで、自由に、伸び伸びと、自らの意志で行動することを体得していくことができました。

新見先生の息子さんが、「子どもの頃厳しかった父親が、孫ができ優しい父親に変わり、晩年は赤子のような父親でありました。」と語られたのが印象的でした。

ご冥福をお祈りいたします。



昭和63年

中野先輩を偲んで (文武両道の人)

林 孝 治 (高校2回)



広島の人に聞いても、岡山の人に聞いても、京都の人に聞いても、「中野さんは巧かった」と誰に聞いても言われる。

オリンピックの話になると、ご自分から「わしもオリンピックに行ったのよ」と言われていました。

「巧かった」のはどうしてか、何故「巧かった」のか長い間、疑問に思い続けてきました。その訳が最近、理解できるようになりました。

「最初からボールを蹴れる者は、おらんよ」、「毎日の訓練よ」とご本人は言われていました。

付属小学校時代

中野先輩の巧い理由は「経歴」にあり、それは小学校からサッカーを始められたことが起源となりました。

明治42年10月5日安芸郡温品(現・広島市東区)に生まれ、温品小学校に入学(親父が清涼飲料水をつくるようになり)5年生の時、広島駅付近の大須賀町に住み、5・6年は県立師範の付属小学校(現広島大学付属東雲小学校)に編入されました。

小学校の先生方は、休憩時間や、放課後、当時としては最も目新しいスポーツであったサッカーを教えてくださいました」と述べられておられます。

先に「秋山先生を偲んで」と題して「広島の蹴球の源流」広島高等師範学校の一部を紹介したのは、ここにも理由の一つがあります。秋山先生にも中野先輩にも大きな影響があるからであります。

次に、小学5年生です。現在、日本サッカー協会が「小学校でなく、幼稚園から指導せよ」と言う意味はここにあると思います。サッカーは勿論どんなスポーツでも、習い事でも「早やければ、早いほど、」良い結果がでております。モーツァルトは母親の胎内で姉ナンネルのヴァイオリンの父親のレッスンを聴いて育ち、3歳で和音を弾き、4歳から父のピアノのレッスンを開始、5歳で作曲、6歳で一流のピアニストとなっております。

広島学院中学2年生、坂倉健太君は少年少女囲碁大会で優勝しました。5歳の時から囲碁を楽しんで、練習しておりました。

最高の舞台の世界カップで金メダルを獲得した「なでしこジャパン」最高の仲間と共に、主将・選手、ハットトリックを含め5得点、最高殊勲選手(MVP)の澤 穂希は確か5歳からサッカーをアメリカではじめている、ではありませんか。最近では柔道の金メダリスト浅見八瑠奈選手は3歳から叔父の河野誠司の道場で訓練をはじめております。繰り返しします「早ければ、早いほど良い」ではありませんか。

中野先輩は先生である指導者にも恵まれ、蹴球を習うと同時に師範学校の生徒の練習・試合の見える、恵まれた師範学校の環境で育てて来られたからだと思います。中野先輩が「サッカーの好きな少年」に育てる素地がこの学校にあったと思います。この学校が中野先輩をサッカーの虜にしたのです。「サッカーを好きにした」のであられると思わされます。広島がサッカー王国といわれ、サッカーが栄えたのは第一次大戦で日本が青島(中国山東半島、ドイツの要塞)を占領した時のドイツ人捕虜が似島に連れてこられて、球を蹴っていたのが、一つのきっかけです。広島高師・鹿島師範などと練習試合を行いドイツ兵チームが大勝します。彼らのテクニックを広島の学生たちが肌で感じ・習い・覚えたことから広島のサッカーは向上したのです。大正8年のことでした。

広島高等師範学校は日本に東京と広島の二校しかなく、日本の優秀な教育者の集団であり、教師も生徒も日本一の環境の教育機関でした。このことは、広島が日本一の教育県であって当然の環境でもありましたし、(高師のグラウンドがありました)広島が日本のサッカー王国に育てられた根源は広島高等師範学校にあると思います。

世界のサッカーを広島が吸収したことも、サッカー王国の礎になったことも事実です。(ビール・キックもこの頃ドイツ兵は使っていたようです。)天皇杯65年史、第2回2位の広島高師、村田房一氏の記事にもあります。

修道中学校時代

中野先輩は、その後大正10年、修道中学に進学されました。

その頃、広島中学、後の広島一中、現在の国泰寺高校と広島高等師範学校の付属中学（現在の広大付属）が強く、全国のトップクラスでした。

秋山先生の記事にもありますが、「何負けるものか、何時かはやってやるのだ」この意気を十分に生徒間に徹底せしめ若い者の血を沸かし青年に意気を益々発揚せしめるには蹴球が最も適せるものであり之が蹴球部の使命であるとの考えで日々練習を続けています。とあります。

中野先輩の記録では、修道には蹴球部がまだなく、情熱を持つ者が学校と掛け合って5年生のときに蹴球部が誕生しました。

と記されてあります。また、対談「広島経済人の昭和史」の写真は大正14年5月、近県中等学校蹴球大会で優勝（山口大会）修道中学4年生とあります。当時の修道は南竹屋町にあり、グラウンドが狭く走る・蹴るのみの基礎練習しかできなかった。とあります。（旧中15回卒業石田先生提供の竹屋町鳥瞰図による）

大正14年6月 三高専主催大会 0-5

付属中に大敗しました。

昭和2年6月 高師主催大会 0-5 付属中

12月 第10回全国大会県予選 0-4 付属中

昭和3年4月18日 校内蹴球大会がはじまり、或る先輩の話、校内大会で秋山先生や蹴球部の幹部がプレーを見て、技術のある者・ファイトのある者・足の早い者をマークして対外試合前から練習に参加させ、仲良く一生懸命に練習した。中野先輩には「よく、しごかれたもんだ、だけど、あの頃が懐かしいナー」と言われていました。

昭和3年5月 1-3 付属中

9月 2-0 付属中

12月 第11回全国大会県予選 0-9 広島一中

第六高等学校時代

その後、昭和3年に中野先輩は、第六高等学校（現在の岡山大学）に進学されました。

旧制高等学校にはインターハイがありました。六高校友会部史（創立百周年記念）によりますと、大正12年第1回から昭和23年第22回（途中中断あり）の中で六



高優勝7回、その第1回目の優勝時の主将でCFが中野先輩であり、六高蹴球部の「伝説上の人物」になった、とあります。

【戦績】

昭和3年度	昭和4年度	昭和5年度
部長 三宅教授	部長 三宅教授	部長 三宅教授
委員 寺町 康平	委員 町田 晴一	委員 山縣 敏昭
三浦 利之	鈴木 宏	草刈三千男
梶岡 源吾	中村 泰政	福安 量平
玉木 立也	中野 重美	片桐秀正政
山本 一	山本 一	磯 野
寺 町	新 田	山 本
中 野	中 野	中 野(主将)
武 村	高 田	高 田
鈴 木	鈴 木	若 林
三 浦	村 井	原 田
山木達(主将)	玉 木(主将)	福 安
奥 田	荒 木	(優勝線は河野)
岩 波	福 安	橋 本
木村 敏	木 村	加 藤
玉 木	高 野	片 桐
		高 野

第6回インターハイ 第7回インターハイ 第8回インターハイ

(1回戦) 不戦勝 (1回戦) 不戦勝 (1回戦)

(2回戦) 抽選勝 (2回戦) (2回戦)

六高3:3東高 六高1:2水戸 六高8:0八高

(3回戦) (3回戦)

六高2:0広島 六高2:0水戸

(準決勝) (準決勝)

六高3:0一高 六高3:1東京

(優勝戦) (優勝戦)

六高2:3早高 六高1:0一高

中野先輩ご本人はその時のことを次のように、書き残しておられます。

「六高3年生のキャプテンのときでした。インターハイの優勝候補随一は第一高等学校（現在の東京大学）を1対0で破り全国優勝しました。その頃の六高サッカー部は素人ばかりで、中学からボールを蹴っていたのは僕ともう一人の2人だけでした。しかし、練習はまじめにやりました。勉強は人並みに、サッカーは人並み以上に打ち込む毎日でした。

試合には全国から30数校が参加しました。当日は土砂降りの大雨でした。一高は上手に試合を運ぼうとするのですが、大雨では体の動きも、ボールの行方もままならず、我々は泥の海のグラウンドで、一心にボールを追いかけ、激戦の末、奇跡とも思われる1点を死守して優勝を得ました。みんな泥まみれで肩を抱き合い、あふれ出る涙をおさえきることができず、我が母

校六高の校歌「操陵のもと春逝かば、遊樂の宴かけ失せて」をはりさけんばかりの大声で歌った、あの感動は私の青春時代の最も貴重な思い出でした。

(一方、大正11年11月広島高等師範学校は天皇杯2回全日本選手権大会「村田房一参加」の優勝戦の大雨の豊島師範グラウンドでGKが足をすべらせて0-1で名古屋蹴球団に負けてしまいました)

「大雨を味方にするも、敵にするも、選手の心構え一つ」であると思います。

写真は、第8回インターハイ優勝記念(昭和6年1月1日)前列一番左が中野先輩



京都帝国大学時代

その後、昭和6年、京都帝国大学 法学部に入学されました。以下、広島県サッカー協会発行の「栄光の足跡」広島サッカー85年史による。

京大に進学しても、広島一中出身の香川 幸や加茂下良重らがかかって汗を流し、日本代表に選出された京大は、関西学生リーグの有力校だった。六高の優勝キャプテン中野は早くから注目を集めた。関西リーグ連覇(1932、33年)のゴールゲッターとなり、東西対抗(関東・関西学生)ではエースストライカーだった。

★昭和6年 関西大学高専リーグ1部

(9月18日~12月13日)

京大15-1 関大 京大11-1 大阪商大

京大12-1 神戸商大 京大3-4 関学

京大(不戦勝) 大阪工大

① 関学5勝 ② 京大4勝1敗

★昭和7年 関西学生リーグ1部

(10月17日~11月27日)

京大6-0 大阪商大 京大13-0 神戸商大

京大5-4 神戸高商 京大2-2 関大

京大4-3 関学

① 京大4勝1分(2年ぶり2度目優勝)

★第4回学生東西優勝校決勝

(昭和7年12月11日・甲子園南運動場)

京大(関西1位) 1-2 慶応(関東1位)

★第2回東西選抜対抗試合

(昭和8年2月12日・神宮競技場)

全関西2-3 全関東

東西選抜対抗メンバー

全関西

金沢(京大) GK

安倍(関学OB) FB

日下(大商大)

三崎(関学) HB

山本(京大)

川西(関学)

大谷(神高商) FW

中野(京大)

永野(京大OB)

西邑(関学)

島(関学)

全関東

綾部(慶大)

井出(早大OB)

友納(慶大)

立原(早大)

右近(慶大)

岩波(慶大)

駒崎(慶大)

塚部(慶大)

津村(慶大)

川本(早大)

菊池(東大)

(「運動年鑑」昭和8年版)

★昭和8年関西学生リーグ1部

(9月24日~12月3日)

京大7-0 大阪外語 京大6-0 大阪商大

京大8-3 神戸高商 京大7-2 関大

京大3-2 関学

① 京大5勝(2年連続3度目の優勝)

★第5回東西学生対抗試合

(昭和8年12月10日・神宮競技場)

京大(関西1位) 2-5 早大(関東1位)

★第10回極東大会代表選考試合

第1戦(昭和9年1月21日・甲子園南運動場)

関西3-5 関東(中野 欠場)

第2戦(昭和9年1月28日・神宮競技場)

関西6-1 関東(中野5点目を入れる)

大日本蹴球協会機関紙「蹴球」昭和9年2月号の表紙に写真掲載

(写真は第2回蹴球東西対抗戦 兼極東大会代表選手選抜、昭和9年1月28日。明治神宮競技場にてシュートを放つ中野先輩)

第2戦メンバー

全関西

金沢(京大) GK

安倍(関学OB) FB

後藤(関学OB)

持地(京大) HB

三崎(関学)

川西(京大)

中野(京大) FW

前川

堺井(関学OB)

西邑(関学)

全関東

熊井(早大)

井出(早大OB)

鈴木(早大)

右近(慶大)

大崎(慶大)

高山(東大)

長谷川

塚部(慶大)

川本(早大)

名取(早大)

大谷 (神高商)

藤岡 (慶大)

〔「運動年鑑」昭和9年版〕

サッカーマン中野の最大の名誉は1934(同9)年、マニラでの第10回極東大会日本代表に選出されたことであろう。

昭和9年1月、蹴球協会は17人の代表と補欠7選手のメンバーとして発表した。

選手

熊井 俊一 (早大)	金沢 宏 (京大)	GK
後藤 雄 (関学卒)	井出多米夫 (早大卒)	RB
安倍 輝雄 (関学卒)	鈴木 保雄 (早大)	LB
高山 英華 (東大)	立原 元夫 (早大)	CH
川西 隆 (関学)		LH
右近徳太郎 (慶大)		RH
中野 重美 (京大)	堺井 秀雄 (関学卒)	RI
野沢 晃 (早大 (広大付属OB))		RI
川本 泰三 (早大)		CF
名取 武 (早大)		LI
西邑 昌一 (関学)		RI
大谷 一二 (神戸高商卒)		

補欠

細細 八郎 (慶大)	GK
掘江 忠雄 (早大)	RB
持地 健六 (京大)	LB
大崎 辰弥 (慶大)	CH
三崎 四郎 (関学)	CH
藤岡 博 (慶大)	LW
松永 行 (東京文理大)	CF

日本協会の会報「蹴球」(昭和9年2月号)には正選手17人の一員として京都帝大R1・中野重美の名がある。

しかし、合宿集合を前にした3月、代表を辞退した。「蹴球」8月号には「就職の都合上、辞退」とだけ載っている。中野の年譜によれば、この3月、京大を卒業し、広島市役所入りしている。何らかの事情で合宿参加が困難だったのかもしれない。と記載されており、ご本人は勿論、誠に残念でなりません。

詳しい事情はお聞きしておりませんが、当時は世界大恐慌の時代でした。我々が何回もお聞きしていることは、「大学は出たけれど」

でありました。この時代でしたからこそ、大好きなサッカーを選択できないで、仕事を優先された、苦しい決断であったと思われる。

対談「広島経済人の昭和史」によりますと、「親父は広島に帰ってこい」と言われ帰ってきたけれど当時広島には大学生はイランと言われ、スポーツ・コーチで生きていこうとも思うこともあり、京都周辺の学校のコーチをして月に5円くらいにはなるが、最低30円

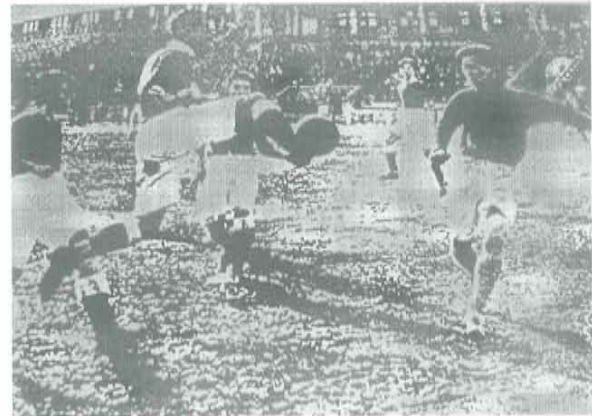
か40円ないと生活できない。

その後、縁あって市役所に入れていただきました。市役所にも大学出身は少なかった。税務の仕事が嫌気がさして広島電気(現・中国電力)に転職しました。(途中・省略)とあります。

秋山先生からも、主将として期待された中野先輩は先生の意を載して「文武両道」に徹して大学卒業まで到達しましたが「仕事にありつく」ことで、想像もしなかった試練に遭遇されたのでは、ないでしょうか。この試練の結果からでしょうか、何回も聞かされた言葉があります。

「エエか。よう聞けヨ。人間はナア、困った時は、苦しい。困った時に、難しい道をエラベヨ。楽な道をイクデナイゾ。楽な方にいけば、次も、その次も楽な方に行くことになるノヨ」

「嘘をつくなヨ。一回嘘をつけば、嘘のために、次も嘘をつき、次の次も嘘をつかんといけんようになる」ものヨ。



人生訓

苦あれば 楽あり

苦を経験せずして、楽はない

平成元年10月5日

中野重美

の書があります。

社会人時代

第5回東西OB選抜対抗試合

(昭和10年2月17日・甲子園南運動場)

関西5-2関東

東西OB試合メンバー

関西

関東

丹羽 (関学) GK

阿倍 (東大)

安倍 (関学) FB

井出 (東大)

後藤 (関学)

竹内悌 (東大)

山本 (京大) HB

石井 (農大)

赤川 (京大)		松丸 (慶大)
守屋 (関学)		浜田 (慶大)
中野 (京大)	FW	角田 (横専)
堺井 (関学)		塚部 (慶大)
永野 (京大)		津村 (慶大)
西邑 (関学)		竹腰 (東大)
市橋 (慶大)		竹内虎 (文理大)

(「運動年鑑」昭和10年版)

第6回東西OB選抜対抗試合

(昭和11年2月11日・甲子園南運動場)

関西0-0 関東 (関西のFWに中野の二字が有る)

広島に帰郷して広島市役所の職員となっても毎年2月の東西OB対抗試合には連続して関西のFWの選手として出場してサッカーの絆はきれなかった。

広島電気時代

広島地方の実業団サッカーは昭和9年3月、中国蹴球協会(広島県協会の前身)と中国新聞社が第1回中国実業団蹴球大会を創設して急速にチームが増えた。当初は呉工廠の水雷部などが優勝、広島株式取引所、広島県庁などにもチームがあった。広島一中(現国泰寺高)、修道中、高師付中などの卒業生を中心に結成された。

中野先輩が昭和11年に入社した広島電気(現中国電力)が12年3月の第4回中国実業団大会に出場した。1回戦で広島貯金局を2-1で破り2回戦で江田島柑橋2-1で下し準決勝に進んだ。しかし、3月28日の準決勝は同社の元社長(松本清助氏)の葬儀と重なり、広島電気は欠場を余儀なくされ、不戦敗となった。年代から見ると、移籍したばかりの中野先輩チーム結成の中心的な役割を果たしたのではないだろうか。

昭和15年5月の第7回中国実業団大会で優勝した。呉砲煩(呉工廠)との決勝戦は6-1(前半2-0、後半4-1)で快勝した。中野先輩は当然FWとのメンバーとして活躍された。

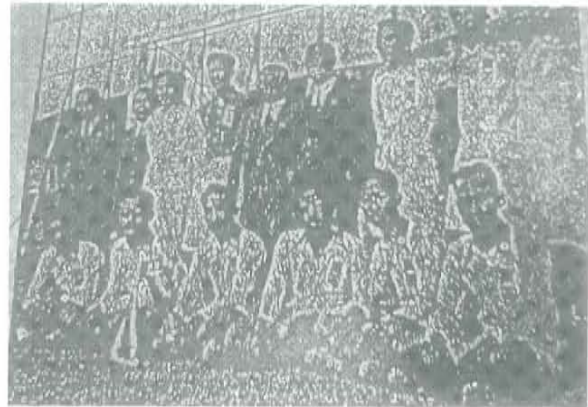
第7回中国実業団大会決勝・昭和15年5月5日・広島一中グラウンド

広島電気		呉砲煩
熊本	GK	吉野
竹村	FB	山口
久保田	HB	山下
内藤		伊東
有馬		横見
竹内	FW	安原
山本		阿倍
橋爪		恒藤
中野		粕谷
山中		正藤

(昭和15年5月5日付中国新聞)

広島電気は昭和16年の第18回中国実業団大会でも決勝に進出、東洋工業に0-4で敗れた。東洋工業は昭和13年の創部であり、好敵手であった。

しかし、戦争が激しくなり17年以降大会は開かれず、試合も中止せざるを得なかった。



広島電気時代の写真

蹴球協会役員

広島電気での中野先輩は選手としてサッカーに興じると共に極東大会代表の一員としての知名度もあり、中国蹴球協会(広島県サッカー協会の前身)の役員として活動した。当時の中国協会長は中野先輩の移籍入社の恩人鈴木貫一氏であり、鈴木会長の命もあつたのではなかろうか。

大日本蹴球協会(現日本サッカー協会)の機関紙「蹴球」によれば、昭和13年1月号巻末の各地協会名簿の中国協会の理事(7名)にご尊名がある。同時に審判として登録してある。

さらに、昭和14年7月号では、全日本選手権各地1次予選の中国地区予選(興文クラブ)の試合評を中野先輩が書いておられます。

また、昭和15年7月号の「蹴球」では同年4月7日の全国主事会議(東京)には中国協会代表として中野先輩の出席を紹介しています。

中国蹴球協会は前身の日本蹴球協会広島支部(大正13年創設)から昭和2年に改称した。昭和初期から主事(現在の理事長職)は広島一中OBの深山静夫氏(進徳高女教員)が務めておられた。しかし、深山氏は16年に愛知県に転出。従ってその前年から中野先輩が主事に就任されたようだ。

戦前、若き日の中野先輩は広島電気の社業の傍ら、サッカー部員であり、蹴球協会の役員として多忙な日々を過ごしておられた。

しかし、戦争激化と共にサッカーをはじめ、あらゆるスポーツは活動を停止しスポーツ団体も消滅、吸収されていく。中野先輩も兵役に従事し、戦前のスポー

ッは完全に息の根をと止められてしまった。

中野先輩の新たな活躍の場は戦後に舞台を移した。

広島国体を1年後に控えた昭和25年5月再興された広島県サッカー協会の副会長に就任された。会長は広島市の外科医、島 薫・島病院長である。同時に中野先輩は広島県体育協会常務理事となり、県スポーツ界の要職に就任された。後年、県体育協会会長としてリーダーシップを発揮されました。

参考文献

- ・「広島経済人の昭和史」(財)
広島地域社会研究センター発行「広島人」第25号
(1989年11月)
- ・大日本蹴球協会機関紙「蹴球」
- ・「運動年鑑」大阪毎日新聞社昭和8年～10年版
- ・中国新聞

アジア大会の誘致

最初に当時の荒木広島市長から「アジア大会をもってこよう」と言われた。自信はなかった。大会は6年後に迫っていました。

サッカー選手として全日本代表にも選ばれたスポーツマンでもある。しかも、アジア大会は以前は「極東オリンピック」と呼んでいて、自分自身がその大会の選手に選ばれた。しかも生誕地広島に誘致する話、自信はないが、反面「是非」の気持ちもあり複雑な心境であったと想像されます。「迷った時は、難しい道を選ばれた」と思います。一方で商工会議所の会頭の立場では広島の社会資本の遅れもあり、広島県体育協会会長の立場で、広島のスポーツは古い歴史と伝統があり、優秀な選手を排出してスポーツ王国と言われた広島のスポートの再構築のこともあり、何とかしなければ、の思いもあり、以後、54年には海外のソウル・インド・クエートに出向かれ、当時の藤田参議院議長の協力も得て日本政府の理解を求める運動に着手され、全力を傾注されました。(藤田先輩については別稿にて)

その甲斐あって、59年に北京開催と併せて異例の形で広島開催が決まりました。「私達の努力が認められた」と、大変喜んでおられました。

それでも課題は残りました。開催に向けて各競技場の立地やアクセスの整備、市民の気運の盛り上がりなど苦悩は絶えませんでした。

修道学園の理事長

修道学園の沿革は1725年(享保年10年11月4日)広島藩主浅野吉長が白島稽古屋敷の一部に「講学所」を創始されました。1870年(明治3年8月)修道館と改

称され修道学園の名称起源とされました。

教育方針は

「知徳併進」——「道を修めた有為な人材」の育成をめざし、実践綱領は

「尊親敬師」——「親と師は心の泉、敬愛の心をこめて」

「至誠勤勉」——「日々、まごころをつくし、ひたすら励み」

「質実剛健」——「かざり気なく、まことありて、強く正しく」

中野理事長は24代目の理事長(1984年5月25日より1989年3月27日)ですが、その以前理事(1960年6月27日より1989年3月27日)そのまだ前

監事(1947年4月23日より1960年6月27日)

と母校の教育・運営に参画されておりました。

その間、千田町の中・高等学校よりも、観音の短期大学・商科大学の沼田の用地の確保、移転の大事業を達成されました。移転後も運営に大変な腐心をされました。その中で、我々サッカーマンの憧れの天然芝のグラウンドを施設して頂きました。

サッカー王国広島で始めて青いグラウンドができました。その初蹴にサッカーの神様と言われたブラジルのベレから贈られた自慢のユニフォームを着て、自らボールを蹴られた写真が残っています。



職 歴

その後の中野先輩の職歴を記録に残しておきましょう。

昭和9年4月	広島市役所	入所
昭和11年8月	広島電灯株式会社	入社
昭和17年4月	中国配電株式会社	に継承
昭和26年5月	中国電力株式会社	に継承
昭和36年12月	同社	理事 労務部長
昭和39年5月	同社	取締役 社長室長
昭和42年11月	同社	常務取締役
昭和46年7月	同社	取締役副社長
昭和50年5月	中国電気工事株式会社	取締役社長
昭和57年6月	同社	取締役会長
平成元年6月	同社	取締役相談役
平成2年10月	株式会社 中電工	に継承
平成3年6月	同社	常任相談役

公 職

学校法人	修道学園	理事長
財団法人	広島県体育協会	会長
財団法人	広島カンツリー倶楽部	理事長
広島商工会議所		会 頭

業界団体歴

中国家庭電気普及会	昭和33年12月
中国照明普及会	昭和33年12月
中国地区農業電化推進協議会 副会長	昭和33年12月
中国地方電力使用合理化委員会 委員長	昭和46年7月
(社)日本電気協会 評議員・幹事	昭和48年5月
(社)日本電設工業協会 常任理事 中国支部長	昭和50年7月
(社)送電線建設技術研究会 理事 中国支部長	昭和50年7月
(財)中国電気保安協会 評議員	昭和50年7月
電気工事会社連絡協議会 副会長	昭和51年5月
中国電気協会 副会長	平成元年5月

スポーツ団体歴

(財)広島県サッカー協会 副会長	昭和44年4月
広島県ゴルフ懇談会 会長	昭和50年8月
(財)広島県体育協会 会長・名誉会長	昭和52年5月
(財)広島市体育振興事業団 理事長	昭和52年8月
アジア競技大会広島招致委員会 副会長	昭和55年3月
(社)広島カンツリー倶楽部 理事長	昭和56年8月
アジア競技大会広島招致を実現する市民の会 会長	昭和57年12月
体力づくり広島県民会議 副会長	昭和58年4月
ワールドカップマラソン広島大会成功させる会 会長	昭和59年12月
広島アジア競技大会推進協議会 名誉会長	昭和61年8月
I A A F 国際駅伝広島大会を応援する会 会長	昭和61年9月
(財)広島アジア競技大会組織委員会 委員	昭和62年4月
中国ゴルフ連盟 理事長	昭和62年6月

(財)日本ゴルフ協会 理事	昭和62年2月
第51回国民体育大会広島県準備委員会 副会長	昭和63年7月
(財)広島県スポーツ振興財団 理事	昭和63年8月

その他公職団体等役員歴

広島県経営者協会 常任理事	昭和35年11月 外59件
---------------	------------------

受 賞

昭和44年11月	昭和44年度	体育功労賞 (広島県知事表彰)
昭和46年10月	昭和46年度	体育功労賞 (文部大臣表彰)
昭和47年10月	昭和47年度	藍綬褒章
昭和59年11月	昭和59年度	社会教育功労表彰 (文部大臣表彰)
昭和62年4月	昭和62年度	勲三等旭日中紋章

逝 去

平成3年8月9日 真寶院釈重誓 行年 81歳
中野家の墓地は広島から小河原に行く途中、温品に差し掛かる、左側の小山の中腹にあります。

そこから、中野家の見下ろせる位置にあり、毎日、生家を眺めておられます。

中野先輩「文武両道」を自ら口にし、ご自分で実践されました、更に、「知識」を得ることも大事で、得た知識を「生きた知恵」として実践し「知恵をさらに磨き実践に活用」されました。常に「感謝の気持ち」をもち、「人のために役に立たたい」ことを実践されました。プラン・ドゥ・シィ・チェックを常に言われ、その中で、「行うこと」が一番難しいと、常に、言われておりました。行動を通じて知識の完成を求めること。知識とは心、行動とは体で、心と体は努力によって、いくらでも鍛えることができる。鍛えれば向上する。どこまでも後天的なことで、最初からボールの蹴れる者はいない。サッカーは人生の縮図であり、サッカーにもルールがありペナルティもあり、グラウンドに範囲があり、時間の制限があります。努力なしで、立派な選手にはなれません。

中野先輩、長い間、サッカーを通じて、業務を通じて、「努力する、ルールを守る」を生活信条として「如何に生きるか」を、ご指導頂き誠に有難う御座いました。どうか、安らかに眠り下さい。

合 掌

縁の下の力もち (修道蹴球の礎)

林 孝 治 (高校2回)

戦績の栄光の足跡には、選手全員に同じような、苦しい練習がありました。しかし、また選手として試合のグラウンドに立つことのできなかつた生徒や修道のサッカーの歴史に、ご尊名すら掲載されなかつた生徒も沢山おられます。また、貴重な記録を書き残していただいた先輩も沢山おられます。

すでに、「修道蹴球のあゆみ」の発行の折も、多くの関係者に、「公平に、個のためでなく、公の多くの方々のために」と、お願いしましたが、取り入れられず、慚愧にたえません。

この度は、時間の経過があり、その方々の消息を調べることもできず、時間の経過と共に、益々資料の入手は困難が予想されますが、資料と時間と法令の許すかぎり、広範囲に掘りお越し、より具体的に、記録に残し、お役に立ちたいための一念でとり始めました。

そして、先輩（一家では先祖）の尊い苦勞により実践され創出された歴史を生きた体験として、後輩（子孫）に受け継いでいただき歴史を学び、将来に生かさせていただき、修道の発展のため、サッカーの発展のために、生かしていただきたいものです。

OB会名簿の1ページの1番最初の1番古い先輩から紹介いたします。

- (1) 旧中16回 河口 覚一
- (2) 17回 岡田 寿美
(岡島 四郎元校長の同級生徒) 加茂郡内海町にいる
- (3) 梶原 徳夫 フィリピンに行っていた
- (4) 清水 洋司 高知にいや
- (5) 八木 邦男



(6) 吉瀬 東京にいる

「河口先輩」は広島が一番の繁華街である「広島市中区本通り」に住まいしておられ、代々、有名な食品店の後継者で、その店を経営されておられました。

残念ながら、古いエピソードが入手できません。

現在は写真の通り、お店の西側に「河口屋」の称号があります。近所を通られることがありましたら、拝見して下さい。

ご本人の、ご尊顔の写真は近所に住んでおられる木村先輩(38回)にお願いして、後継者の方に、お借りして、コピーしたものです。ご高齢の様子で、お元気の様子が窺えます。若いころは、背も高く、体も大きく、ハンサムでさぞかし、大きなボールを蹴っては走り、相手を困らせたのではないのでしょうか。

秋山先生が大正10年卒(旧中12回)ですから竹屋町の修道中時代に同じ校庭で同じ校舎で学ばれたのではないのでしょうか。

次は、「岡田・梶原・清水先輩」の記録が残念ながら見当たりません。八木先輩の記録により推測して下さい。

「八木邦男先輩」

秋山先生の記録にある、「前前、山高主将八木君」のことと推測されます。昭和5年3月発行「修道」26号に「母校 蹴球の思い出」の記録があります。

第一に冒頭に「詰まらないながら蹴球部創立第一回の首将をしていました私が」と記載されてあります。

「修道蹴球のあゆみ」(以下「あゆみ」と省略します)編集に当たり中野重美先輩が初代主将と記載されるの

で、八木邦男先輩の記録があることが不審になり、当時、最高齢者の堤先輩を名古屋市に行き尋ねました。「あゆみ」に河口覚一キャプテンとあります。

次に小畑先生・宮原少佐のご尊名が何回も出てきます。

「修道新聞」第16号昭和25年12月20日発行の八

木邦夫先輩の記事「思い出す事も」「秋山先生の御就任と同時に部長になっていただいて、修道蹴球部の有
史というべきものが始まる訳である。時に大正14年4
月である。」とあり、それ以前は「小畑先生の御恩は
忘れ難い」と記されてあります。



母校

蹴球の思い出

鴻南の虫にて

卒業生 八木 邦夫

詰らないながら蹴球部創立第一回の首將をして
ひました私が當時一年だった今の五年が
今度學窓を去るに際し又過去四ヶ年續けまし
た山口の遺征を今年限り止しますに就いて少
しく雜誌の余白を頂きましてこゝに母校蹴球
部の生ひ起ちを少しく御話して見たいと思ひ
ます。何分話が六七年の昔に歸りますので皆
さんの中の多くの人には何の面白味も無い事
だろうと思ひます。私が修道に進入りました
年即大正十年(この年は今母校の化學の先生
をしてゐらつしやいます秋山先生が修道を御
卒業になつた年です)には蹴球の蹴の字もあ
りませんでした。尤もその頃修道も蹴球をや
ると云ふので高師あたりからコーナを呼びか
けた事もあるんですが今の五年は知つてゐま
す様に何分あの竹屋町の舊修道の運動場の狭
かつたのと全校に蹴球と云ふものが理解され
てゐなかつた爲にそのまゝ立ち消へになつた
のだそうです。然し朝學校が始まる前と晝の
休の時間には私達は恐ろしくて近よりもしま
せんでしたが五年や四年の上級の人達がフツ
トボールを手に持つてそれを高く蹴り上げて
又その落ちて来るのを喧嘩の様に走り廻
つて取つて遊んでゐました。今から考へれば
夢の様な話ですが當時はフットボールがある
と云ふ事が修道としては珍らしい事だつたの

です。ですから蹴り上げると云ふのは名だけ
で高々五六間位それもその當時は靴の規定が
今の様に編み上げて無く短靴だつたので蹴る
はづみにケートルのスピナーを切つて靴を自分
で球と一緒に蹴り上げるものやポロ靴の先を
蹴りそこなつて口を開ける者なのでとんだ滑
稽な光景でした。それから二年間は同じ様な
事をしてゐましたが私達が三年の時今廣島の
階行社の理事をしてゐられる兵式の宮原少佐
が當時段々盛んになつて来る蹴球と云ふもの
を理解して下さつて兵式の時間に五年に丈そ
れも僅か四十米位の長さで幅が五十米位の筋
も何も引いてない範圍(舊修道の運動場はグ
ランドの中にテニスコートや走幅飛の砂場が
あつたのでこんな形にしか取れなかつたので
す)で一クラスを二つに分けて蹴球と云へば
手に球を前程持たないと云ふ程度の蹴球の眞
似の様な事をやり出されました。そして五年
や四年のそんな蹴球の眞似の様な事が好きな
人が放隊後残つて(私はその頃庭球の選手を
してゐましたので良く覚えてゐませんが)片
方が五六人づつでやつてゐた様です。その頃
私は庭球の小さな細工や、やれ球がラインに
かゝつたとか懸らないとか云つて神繩を失ら
す馬鹿らしさに餘味がしてゐましたので間も
なくこの蹴球の眞似の様な事が好きな人々の
中に這入りました。そんな事をしてゐる中に
その年の冬には普通の修道の人よりか幾らか
球を良く蹴る(と云ひましてもあの勢々四十
米位の幅のグラウンドの隅まで蹴るものは一人
もゐませんでした)人々が十人位は集つて
練習の様な事をしてゐる様な日が時々ありま

した。そんな階段を経て私達が四年になりま
した時はどうか、こうか學校の普通の人と離
れて蹴球をやつて見ようと思ふ様な人が定數
の十一人位は集る様になりました。そんな
なると少しはそんな連中の気分も出るもので
宮原少佐に御願してグラウンドの隅と隅に只ゴ
ールの幅に立てたと云ふ丈の竿の様な長い棒
を二本買つてもらつてそれを立て、その上に
ゴールの横の棒の高さに繩を張つてそれに蹴
り込む様になりました。それでも三間と離れ
ばその中に蹴り込む者は一人もゐませんでし
た。その中に蹴球の規則を讀んだり靴を買つ
たりして大部蹴球の格構を成す様になつて來
ました。そしてその年の秋には今から考へれ
ば腹分恥さらしの話ですがそれでも皆かなり
自信のある積で高師の蹴球大會に出場しまし
た。ところが案外にも當時かなり強く一中等
と相當の試合をしてゐました廣師と組んで(二
對)の接戦(クローズゲーム)をやつたので世間
からは修道も蹴球をやり出したんだ位の程
度に認められ又學校ではその爲にそれ迄競技
部の中にあつた名丈の蹴球部が私達が五年に
なると同時に私達の願が聞き入れられて完全
に競技部から獨立しそれ迄競技部々長の小畑
先生の色々御世話になつてゐたのがその年
新らしく修道に御還入りになつた秋山先生を
部長に頂き部員もそれ迄五年、四年一人宛だ
つたのが各二人宛となりこゝに修道中學校蹴
球部は名實共に備つた創立の慶をあげ得る事
になつたのであります。部になつた私達の事
は余く例へんにもなしてました。それから
ボールも立ちました。選手も揃ひました。然

し悲しいかな私達には蹴球をする丈のグラウンドがありませんでした。高々四十五米位の幅の元の運動場は選手の誰が蹴つても狭うございました。庭球のコートがあり体操の道具があり縦にもグラウンドは思ふ様に使へませんでした。私達は一中に敗れたくなかつたのです。全く文字通り死にも狂ひの練習をしました。十分の休の時間でも練習しました。雨が降つても家に歸るものは居ませんでした。グラウンドの無い爲に私達は或る日は一中に或る日は高師に高工に又一日は高校に御互が奮まし合ひやがて来らん大會の希望に燃へて練習しました。他校のグラウンドを借りる事は心苦しい事です。私達は自分達におし要せる壓迫に戦ひつゝ試合をしては批評してもらひ敬へてもらひ御互に研究して進みました。夏休の奥の海兵團でした合宿も血の純染む様な練習でした。私達は自分達が死んでも勝たねばと思ふ山口の大會が迫るにつれて朝は學校の始まる前から夜は球が完全に見えない様になる迄あの狭いグラウンドで練習しました。そして私達の燃ゆる様な意氣は遠征後廣島の大會では敗れましたけれども遂に山口で實を結び大正十四年十一月一日あの榮ある月桂冠は吾々の頭上高く掲げられました。その當時のみました選手は五年では今東京にのみます吉瀨君。高知にのみます清水君。フィリッピンに行つて最近歸朝しました梶原君。賀茂郡の内海にのみます岡田君とそれから私(四年)では今岡山にのみます中野君。三年では東京にのみます松永君。三上君。廣島に居る辰野君。神田君。堤君二年では京都にのみます吉本君と東京にのみます齊藤君

でした。その年の私達の一年間の戦績を挙げたならば余りに弱かつたのに驚くでせう。然しこれも弱かつた過去の蹴球部の思出です。讀んで下さい。

一中5——修中0 附中3——修中1
 修中2——高師0 高師0——修中0
 高工4——修中0
 高師春季リーグ戦

一中7——修中0 附中1——修中1
 修中2——陵中1 廣校3——修中0
 軍艦伊勢0——修中3 鯉城サッカー6——修中0
 アカンア2——修中1
 修中3——十五區遠征0

廣校5——修中1 修中3——六高2
 鯉城サッカー5——修中0
 修中2——高師1 一中7——修中0
 附中4——修中0 一中5——修中2
 廣校4——修中0 高師1——修中0
 修中1——廣師0 一中0——修中0
 高師1——修中0

山口高等學校近縣中等學校蹴球大會
 修中1——山師0 修中1——山中0
 廣島高専中等蹴球大會
 廣師1——修中0

私達は山口で勝ちましたがその次の年中野君の時山師に三對〇で無様に敗れました。松永君の時は遠征出来ませんでした。あの松永君が遠征直前に部の統一の取れない爲遠征の出来ない事を嘆いて泣いた事を思ひ出します。吉本君の時に巨格の實力のあつたのに二對〇で山師に敗れました。私達は山師を呪ひました。私達は山師に勝ちたかつたので

す。死んでも山師に勝つべく練習して来ました。そして昭和四年丁度蹴球部創立五週年を迎へた今年修中蹴球部は完全に立派な廣島の代表チームになりました。私が部の出身だからそう云ふのぢやありません。完全に立派なチームです。強いチームです。戦にこそ敗れましたが一中にも附中にも敗けない完全に出來上つたチームです。私達が一日として忘れる事の出来なかつた山師は先日山口遠征に六對〇で修中軍の拜先にひれ伏しました。私達は泣きました。この日あらん爲に戦つてくれた過去の選手の爲に。あの大會で優勝こそ出来ませんでした。然しあのチーム。堂々たる品位あるあの母校のチーム。到底勝つた山中盟の遠く足下に及びもつかないところですよ。山中は已にその後山口のリーグ戦で山師に二對〇で敗れてゐます。實力あつて敗れたのは哀れです。實を結ぶもの將して力ひもなく花と散るもの將して綿命でもありません。私は創立五年にして既に鯉城々々に君臨する母校蹴球部を目のあたり眺め過ぎ去つた部の歴史を想ふとき只々感慨無量です。皆さんあの母教蹴球部が日本蹴球界に堂々調歩する日を指折り數へて待つてゐて下さい。あゝ想はば苦悶の五ヶ年でした。終りにのぞみ母校蹴球部をより健實に御援助あらん事を切望して拙ない筆を擱きます。

一九二九、一一、一三——

サッカー談義

僕がこの学校の生徒であつた頃にも、今から二十年以上も昔になるが、蹴球部があつた。總じて選手全体の技能のレベルがおそろしく低かつたものだから、當時の廣府に於ける強豪一中、縣師、附中などにはてんで齒が立たなかつた。せつかく懇操に行つても、修道勢はいつともきりきり舞させられていて、見ていてごだい胸裏が悪かつた。だから僕はサッカーというものは大して關心がもてなかつた。廣高にはいると、修道をきりきり舞させた一中や附中のサッカーにいた連中が廣高のサッカーを形づくつていた。當時の廣高は手塚、野澤等のいた黄金時代の直後で、有本、金子、石原等がいて依然としてインター・ハイの有力な優勝候補であつた。この全國に名だたる廣高サッカーのうちす待ない長妻族が演ずる豪快なプレイが、僕にサッカーの面白さを教えた。薄い紅色のユニフォームがゴール前に殺到し、しやにむに得點した後歡聲を擧げながらハイ・ラインに歸つて行く情景は全く小氣味がよかつた。東大にはいると、ライオン・ブリーのチームは高校チームと全くおもむきを異にしていてのを見た。フアイトで押切ろろとする強引さがない代りに、高校チームに見るような無駄な動きがなく、現づめる技法に終始し、ぶつつかめるような激しさのない代りに、サッカーの醍醐味を味わせてくれるフライン・プレイがふんだんに見られた。當時の東大も早稲田、慶應と共に東都大の強いつつて、別荘を争う東大の活躍を見んものと、東大の出る試合には大抵神宮外苑まで出かけて行つた。その頃東大には高山という名選手があり、早稲田に一流の名手加納がいたのもこの時代だつたと思ふ。

それは、正月に東大で開かれるインター・ハイで、廣高チームの試合に夢中の選抜を造つたものであつた。インター・ハイは東大と京大とで交替に行われたので、隔年に正月東大グラウンドに現われるのが僕のならわしとなつた。結婚してからは女房を連れて後輩の長妻族たちの活躍を見物し、「どうだ、強いじやろうか」と傍の女房に自慢したりした。僕が中學生だつた頃は、でなつていなかつた。修道の蹴球部がその後次第に強大となり、神戸一中などと全國の別荘を争つていての、新聞で敗むようになると、「却々やりおるわい」と内心のうれしさがこみ上げてくるのを禁じ得なかつた。中學のサッカーの試合は大抵阪神地方で行われ、東京に現われたことがないので、強くなつてからの修道サッカーを遙に見ることがなかつた。僕が教師になつて三年目からは、修道は修道のやる試合は缺かすに見た。爾來今日まで修道サッカーが公式の試合で破れたのを一度だけ見た。それは去年の市体育大会の高校サッカー優勝の日雨模様であつたせい。懇操に行つたのは僕と、皮肉にも、それまでサッカーの試合を見たことがなくこの日始めて懇操に來られた。及川前校長の二人だけ、負傷者續出でさぶる旗色悪く、「なに今に入れますよ」と僕はさかんに及川先生に力んだものだつたが、結局二對一で本校の負、その晩ねむれない程僕はくやしがつたものであつた。蹴球部參與になつてからは完全な不敗で、「尤も僕の方がなんかいささかもはいつていないのだが」勝試合を見られる楽しさからせつせとグラウンド通いをした。山口遠征、松江遠征等僕には楽しい思い出だが、全國制覇した國体に都合上行けなかつたことは生涯の恨事である。松本、松川、杉野、池田、胡等、全國制覇の原動力であり、高校選手として正しく第一級であるこれらの諸君が卒業して行く來年度の責任は大きい。偉業を繼承できるだけの努力精進を願つてやまない。(Y生)

自分が英語を教えて三十年に近く、教えた生徒は數千人に上るだろうと思ふ。さて英語教師としての自分の願は、「あの先生に習つたから英語が面白くやつた」と云う生徒が一人でもあればよいと思ふ。



英語教授・綽名

「生誕の計一はこれに盡きと思ふ位である。何とも口惜しく思う次第だ。自分の貰つてゐる姓名は魚類の名である。新見先生あつたりの説明によると、此の由來は間違つてゐるようであるが、現在の意味は、今が食べどきで、どの魚屋の」

「生誕の計一はこれに盡きと思ふ位である。何とも口惜しく思う次第だ。自分の貰つてゐる姓名は魚類の名である。新見先生あつたりの説明によると、此の由來は間違つてゐるようであるが、現在の意味は、今が食べどきで、どの魚屋の」

「生誕の計一はこれに盡きと思ふ位である。何とも口惜しく思う次第だ。自分の貰つてゐる姓名は魚類の名である。新見先生あつたりの説明によると、此の由來は間違つてゐるようであるが、現在の意味は、今が食べどきで、どの魚屋の」

「生誕の計一はこれに盡きと思ふ位である。何とも口惜しく思う次第だ。自分の貰つてゐる姓名は魚類の名である。新見先生あつたりの説明によると、此の由來は間違つてゐるようであるが、現在の意味は、今が食べどきで、どの魚屋の」

思い出す事ども

八木 邦夫

「山寺の和尚さんが、あまりは蹴りたしまりはなし」という歌の文句があるが、私共のはまりはあつたが場所がないと言う状態だった何しろ當時の修道は学校の入口を探すのにうっかりす

ると、半日位はかかりそうなのだし、運動場が、又トナチ牧家の生徒さん方が見たら「運動場とは道の廣きものなり」と答えそうな代物、今廣島の方々に出来ている、都市計画の道路の方が遙かに広い

それでも、大正十三年たつた三人、好きな者が集つてボールを蹴つていた頃は、せいぜい四十米そこそこの運動場の巾一杯に蹴ると、お互いに、手をたたいて喜んでしまつたのが別に狭さも感じなかつたが、一人、二人と同好の士が増えてやつと十四、五人になつた頃には、この道路並みの運動場もいささか狭くなつてきた、長さは百米、巾は四十五米もあつたらうか……

それと、人々が通るし中頃には庭球のコートがあつてすこぶる激着に豊んでいた二十人足らずの仲間だけで試合のまねごとをやる時など、通行中の荷車の車にボールが乗つたり、女子人の尻に蹴りつけたり、小さい子供の足を拂つて泣かせたり、こちらが大馬面馬にやつていただけに大變なものである

この當時の一年上の先輩はとうとう部にもならないまで翌年卒業されたが、この年から豫算を買つて部(蹴球部)になつた(三年迄は競技部の豫算を買つてボールを買つて貰つていた様に思うが、この間の小畑先生の御恩は忘れ難い)秋山先生が御就任と同時に部長になつていたが、この有史時代ともいへば、その時が大正十四年春四月、半世紀前の事である

いよいよ選手も決まると本朋子だけに大變である、何しろ當時の廣島の蹴球界には、廣島高等専科、廣島一中、附屬中等と、いう巨豪が全国に勇名をさせている、ただごとではない、別に申し合せた際でもないが、朝は朝禮の一時間位前に八割は顔を描いて練習、十分の休み時間も蹴る夜は八時頃迄やつたし、日が短くなつてからはボールを白墨でぬつて預まつたりもした、よく一人も落着かなかつたと感心するが、今と違つて平和な時代だつたホーム・グラウンドでは仕事にならぬので試合をしてはその後で、運動場を借りて正規の廣島で練習をしなが、指導を受けたが、この時代の廣島高師、廣高、一中、附中の方々の御厚意は一生忘れ難いものである

その頃の試合の成績はおもむね、零敗だつた、相違なく、対高師二對零、對廣高五對零、對一中七對零、對附中四對零といつた工合零敗もこの位になると堂々たるものであり、敗倫兵の貫徹十分である、しかし決して敗けて威張つていた譯ではないのでよく泣いたそのせい、今もつて直ぐ感懐する傾向があり、いささか慢性感激カタルの症状が残存するきらがある、そのうち、試合に二、三回は入る迄に出世した頃、秋、山口高等學校主催の浜縣中等學校蹴球大会に遠征した

白墨でぬつて預まつたりもした、よく一人も落着かなかつたと感心するが、今と違つて平和な時代だつたホーム・グラウンドでは仕事にならぬので試合をしてはその後で、運動場を借りて正規の廣島で練習をしなが、指導を受けたが、この時代の廣島高師、廣高、一中、附中の方々の御厚意は一生忘れ難いものである

その頃の試合の成績はおもむね、零敗だつた、相違なく、対高師二對零、對廣高五對零、對一中七對零、對附中四對零といつた工合零敗もこの位になると堂々たるものであり、敗倫兵の貫徹十分である、しかし決して敗けて威張つていた譯ではないのでよく泣いたそのせい、今もつて直ぐ感懐する傾向があり、いささか慢性感激カタルの症状が残存するきらがある、そのうち、試合に二、三回は入る迄に出世した頃、秋、山口高等學校主催の浜縣中等學校蹴球大会に遠征した

廣島からは修道だけだつたが、山口には山口師範學校が連続優勝の旗を持っていた、参加チームは五校位だつた様に思うが山口在學の一中、附中、修道の先輩に初陣なのでひさしく感動され、意氣に感じ、同列を歩いて開つたとうとう優勝まで行つて、山口師範とぶつつかつた、當時の山口師範は山口高校に勝つていてその山口高校に廣島高校は負けているということになると、一寸勝味はない

いよいよ試合開始(大会二日目寒朝だつた、この日は修道は運動會で、吉報を待つてくれたらしい)二十分頃、押され氣味を逆襲で一點先取、そのままハーフタイム、こうなつてくると蹴球入門第一課的なこちらの方が万事に氣が樂であるボールをタツチラインの側へ持つて行つては大きな聲で「パス」と言つては出来るだけ外へ向つて遠く迄蹴る、山高の廻りは一面の田圃である、専ら「時」をかきだ、餘り堂々としてないかも知れないがとに角勝つた、勝つてばやはり優勝である

優勝旗授與式で山高の運動部長の教授が「今日の修道の優勝は二にバツクマンの偉大なキックの賜である」と云はれて、いささか嬉しいやら、くすぐつたいやらの仕来だつた、その晩優勝の夢(修道の運動部の中で縣外で優勝したのは、この時が始めての歴史が出来たのだが)を結んでいた午前二時頃、修道の先輩の一人が真暗な中で優勝旗を抱いて「良く勝つてくれた」といつておられた姿を思い出すが、あれから文字通り春風秋雨二十五五年、今年の國体で修道がサッカーで優勝した新聞の記事をみて、

今更の様にあの晩の先輩の心魂が解る様な氣がする、いつの日も短い人生にそこはかとなき人間の意思の芽生えから長い歴史が創られてゆく、これは二十五五年の修道蹴球史と母校の榮譽だけなく創設期の偉大な指導者だつた高師、廣高、一中、附中の諸先輩とその母校を含む「ふるさと廣島」の誇りであり、又人類の進歩と幸福のためへの健全な精神の糧でもある、早稲田まことに偉哉ながら、母校蹴球部の第一回卒業生の一人として、そして身近かな同窓生の喜びの聲を代表して心からの慶びと共に、ささやかな心の足跡を送らせて頂く、蹴球部と運動部と今後の生徒諸君、お大事に……(筆者は本校第一回蹴球部主将)

苦悩と栄光の主将 (戦後、初のキャプテン)

林 孝 治 (高校2回)

昭和16年に勃発した大東亜戦争は、昭和20年(1945)広島市に原爆が投下されて、終結しました。母校の焼失は免れたものの、南向きの建物は全部倒壊し、東向きの建物も大破しました。

当時、5年生は既に4年生で一部の生徒は卒業し、5年に進級した生徒は日本製鋼所に、4年生は三菱(江波工場)に、3年生は兵器廠に、我々2年生は市役所東側雑魚場町の建物疎開と一部は日本製鋼所高屋工場に、1年生は前日の日曜日に雑魚場町に動員されたので原爆当日は休みで自宅にいましたがそれぞれ動員されて、学校には生徒はほとんど不在で、糞抜きのからでした。

終戦を迎え、陸海空軍の学校に進学した生徒も含めて、それぞれが母校に帰ってきました。しかし、教室は



秋山元英先生

ありません。

そこで、全校生徒が校舎の瓦を整理、材木を南側の武器庫の隣に運搬した後を掃除し、藤田組の大工さんにきていただき、校舎の建て替えが始まり、南側に運んだ材木から必要な材料を運んできて、校舎の建設の、お手伝いをして校舎の建て方が始まりました。

やがて雨漏りはありませんがガラスのない窓はトタンとベニア板で囲い、暗い教室ができました。

戦後の蹴球の始まりは翌年の昭和21年3月頃からでしょうか。秋山元英先生より木村静人先輩に「広島一中に勝つ蹴球部」の再建の指示がありました。

秋山先生は大正10年の修道の卒業生であり、広島高等工業専門学校の応用化学

に進学させられ、卒業後は母校の物理・化学の教師として奉職されており、母校の歴史のすべてに精通された教師であり、生徒にとっては、兄貴のような、親父のような、神様のような先生でありました。

木村先輩のことについては、皆実小学校時代のころはゴールキーパーとして活躍されていたことも、よく承知しておられました。木村さんが修道に進学され、「蹴球で木村の右に出る者は修道にはいない」、ことも十分承知しておられ、絶大な信頼があり、すべて木村先輩に任かせられ、運動場(校庭)に練習を見にこられることもありませんでした。

しかし、陰の力として、サポートしていただいていたようでもあります。例えば、物的には、戦後の物不足の時代にどこからか古いボールを捜してきていただき、人的にはメンバーが不足の様子だと、器用そうな生徒に声かけを、されていたようです。

放課後、蹴球部の練習を朝礼台のところに座ってよく見ていました。準備体操をして、校外の工場帝人の周りを走り、丸くなって一つしかないボールを皆で蹴るのです。

それから、一人ずつストップを10本、シュートを10本、ヘディングを10本、蹴り返し10本、ロビングボールの処理10本、のごときであります。

よくないプレイは10本に入りません。8本まで出来て、後2本になっても、合格しないと、それから10本練習しても終わりません。ラスト2本になり、疲れて、くたくたになっても終わりません。疲れてからの頑張りはありません。この粘りがないと勝つことはできません。諦めてはなりません。ボールに早く近寄り、ボールを待つことも、ボールが完全にライン割るまで追いかける必要はありません。

ネバーギブアップこれが「修道魂」であると思っております。

木村先輩はチームメイトをこのように呼んでおられました。

渡辺さんはワッタン、西本さんはマメ、林さんはリン、中西さんはヤス、田村さんはターム、吉野さんはヨシン、新宅さんはアンサン、川崎さんはカワサキ、米山さんはヨネサン、福永さんはフクサン、特に米山・福永さんは戦中は上級生でした。終戦になって下級生



木村静人先輩

になりました。

家系で父母・祖父母の先祖を敬い、大切にすることと同じように、学校では1年でも上の先輩を尊敬されておりました。「尊親敬師」に基づくもので、「知徳併進」「知」を深め、「徳」を高め、「心」豊かな有為な人材の育成である〈修道〉の精神を実践されておられました。

このように、呼び方が違うわけです。一人ひとりについて、親近感もあり、個人差もあり、細かいことにも気配りがなされており、それでもって、チームを束ねておられ、11人の力を12人の力にして、対戦されていたと思われま

す。苦悩はまだまた続きます。物は何もかもありません。食べる物が無い。着る物がない。軍隊の服があればよい。帽子も戦闘帽があればよい。靴も履物があればよい。

蹴球は裸で裸足でやっている人もいました。

中西 泰（藤原）さんが始めて蹴球靴を履いて戦闘帽を被ってコンクリートの上をガリガリと音をたて蹴球靴を履いて通学される姿を見たとき、今の言葉で非常に「カッコいい」のにビックリしました。

ゴールポストは外の運動場にはありましたが、中の運動場では机を二個ならべ、それを目標にしてシュート練習をしておられました。勿論ラインの石灰などはなく、土の上にラインを引いてありました。

元々、千田町には、広島電気（現在の中国電力）の火力発電所があり（現在は変電所）、石炭の燃やした灰で海を埋め立てたため、外の運動場は灰のまま、戦中は畑として畝にして藜を植えた状態にありました。南側には寮がありました。（現在の体育館の場所）

木村先輩は皆実小学校の頃から素晴らしいゴールキーパーの選手でもありましたので、フィードプレイヤーの指導と同時にキーパーの練習の指導もしないと、対戦相手には勝てないことは明らかでキーパーの練習も同時にしなければならなかった。試合では攻守の要としてのハーフセンターとして自らプレイをしながらチーム全体を統率し、個々のポジションに指示をして勝利を目指して活躍して、おられました。

自分を無にして人のため、チームのために、修道のために、先輩の築き上げられた修道の蹴球魂を实践されました。「知識より道義、理屈より実践」であることを教えていただきました。

主将がプレイヤーであり、指導者であり、コーチであり、監督であり、世話人でありました。怪我人が出れば、傷の手当から、すべて面倒をみておられました。

自分のチームの状況を点検して作戦や対策の策定、勝利もすべて主将としての責務でありました。

現在のように、監督あり、コーチありの時代ではあ

りません。マネージャーも、チームドクターもおられません。先輩も母校にこられる人はありませんでした。

このような状況で、修道蹴球部がよく復活できたと思います。「この時・この人」の存在がなかったら、戦後の修道蹴球部は勿論、戦後65年の修道サッカー部は存在しなかったと思います。修道蹴球部にとっての大恩人であります。

チームを離れると、思いやりがあり、人をいたわり、心が深くそして広く、志が高く、さすがしい先輩であります。戦前・戦中・戦後を通じて修道の蹴球の先輩・後輩のこと、また、広島のこと、最近のW杯のこと全てご存じて、生き字引の偉大な先輩であります。

21年8月に広島平和祭の協賛体育大会が元西練兵場の二部隊跡地で開催され修道OB、鯉城蹴球団、アカシヤクラブ、崇徳OBの4チームが参加した記録があります。

21年に第1回の国民体育大会が京阪神で開催され、本大会の予選で修道は広島一中に破れ、広島一中は岡山一中を5-0で破り、山口中を3-0で破り、関西予選で神戸一中に4-1で破れ国体出場はできませんでした。

21年11月に夕刊ひろしま新聞社主催で全関西蹴球祭が開催され10チームが参加して行なわれ修道が優勝しました。苦勞の報いられた瞬間でありました。

市造船、市立中を破り、優勝戦で付属中を破り、見事、優勝することができました。

戦後の学校の復興も蹴球部の復活も木村先輩の苦悩の連続でありましたが、この栄光は蹴球部の勝利だけでなく、荒む戦後の学校全体を非常に明るくし戦後修道学園の繁栄の源となりました。校長以下、教職員を始め全校生徒に夢と希望を与えていただきました。

秋山先生にも大変喜んでいただいたと思います。同時に、戦中、蹴球が中止されていたことが、蹴球が解禁になり、諸先輩にも大変喜んでいただき、校庭に来ていただくことができるようになり、戦前・戦中・戦後の先輩・後輩の繋がりができ「修道蹴球部」の復活ができました。これを機会に修道蹴球の戦後の黄金時代が始まるわけです。

我々後輩に練習や試合を通じて、精神面で修道魂と蹴球のルールやマナーそしてテクニックの面では練習方法やゲームの運び方、体の使い方、修道の歴史そして蹴球部の歴史等を教えていただきました。

木村先輩、本当に有難うございました。感謝・感謝であります。今後も、お元気で我々後輩を、ご指導頂きたく、偏に、お願いいたします。

「未来は歴史の中にある」家庭では父母・祖父母・曾祖父母それ以前の祖先があり、学校には学校の歴史や伝統がある。蹴球部には蹴球部の歴史がある。歴史は過去のことであるが、生きている。歴史を学び、先祖

を、両親を、先輩を、先生への感謝を一時も忘れずに、尊敬して生きることにより、自分の子や孫や子孫に、後輩達に尊い「尊親敬師」の教えを引き継いで、より

良い学校に、より良い蹴球部に、より良い社会にしようではありませんか。



昭和21年9月 比治山下鶴見橋（木造）
広島駅～南千田町（～修道中まで徒歩通学）



昭和26年9月25日
復旧作業に登校する修道中学校4年生



昭和21年2月13日
修道中学校崩壊した校舎



昭和20年10月の原爆ドーム



昭和20年9月末日 修道中学校教道館



昭和21年2月13日
修道中学校グラウンド（校庭）

校是「尊親敬師」について

林 孝 治 (高校2回)

今の世の中は物が豊富になり、お金を出せば何でも手に入る時代になりました。衣食住のすべてが良くなり、勉強する環境も随分良くなりました。

その中で、長い間、何か足りないものを感じておりました。食事も大変良くなりました。その中で、何か足りないものが、山葵か・胡椒か・唐辛子のような感じがしていました。

何が作用したのか定かではありませんが、校是が気になりまして、「知徳併進」を調べて見ました。

第一に、「入学案内」(入学説明書)による。

今まで「知徳併進」と「質実剛健」であると思い込んでおりました。校歌にも、4番に「知徳併進経となり、質実剛健緯となる」とありますので、その通りだと信じておりました。

ところが、保護者に見て頂いている「入学案内」を拝見しますと、何と

教育方針

知徳併進 「道を修めた、有為な人材」の育成をめざし、「知」を深め「こころ」を磨くことにあります。知に偏することなく、人間として豊かな心をそなえた人材の育成こそ、長く受け継がれてきた本校の教育方針です。

- (1) 尊親敬師 (親と師は心の泉、敬愛の心をこめて)
- (2) 至誠勤勉 (日々、まごころつくし、ひたすら励み)
- (3) 質実剛健 (かざり気なく、まことありて、強く正しく)

とありまして、一番目は「尊親敬師」であり、三番目が「質実剛健」であります。

第二に、「パソコン」による。

修道中学校・修道高等学校のウェブサイトを開き、学校概要メニューを開きますと、教育方針があります。上記と同じ記述があります。

第三に、「生徒手帳」による。

(2ページ「修道学園教育の目標」に同様の事柄が

記載され、全生徒が持参しております。

3ページには「修道とは」

6ページには「学園の沿革」と続きます。)

第四に、「学生便覧」による。

(山尾政治学長が「教学の指針」と題して詳細な論文を記述しておられます。一部分を紹介しますと、)

方 針

知徳併進

「知徳併進」は修道学園教学の大方針である。ソクラテスは「徳は知識であり知識は積極的徳行の中にのみ獲られるもので知徳合一にこそ幸福がある」と説いたし、東洋でも王陽明や中江藤樹が知徳合一説を唱道したことは人のよく知るところである。

浅野藩の学風は「道を修めた有為な人格」の育成であり、単なる物識りや無力な知陸の累積でなく、学問、思索が総合されて、正しく強い創造的な生きた人格、民族の文化を創りその進歩を促す動力となる人格を育成することを使命とするものである。

この大方針のもとに、学園に志す者の指標を三つの綱領として掲げた。

これは伝統の学風であり、先哲諸先生によって貫き伝えられた独特の人生信念である。然も古今を通じて誤りなき、高邁な人格の主軸となる至極要道である。

綱 領

1. 尊親敬師

第一に「親を大切にし、先生を敬う」ことである。「夫れ孝は徳の本なり、教の由って生ずる所なり」(孝経)と言われた様にすべての人の人格の根底はここにある。これが戦争に負けたからといって、親子対等の人間関係になったり、変な自由解放が行われたら人間として失格である。昔から「代々の先祖敬うべし。先祖をゆるががせにすれば其家必ず衰うるものなり。」と言ひ、「孝行」の心なき人は神仏もにくませ給いて行末あしきものなり。」と言っているのも「愛敬の源」をわすれては人間としての繁栄のない事を示したものである。

又、「先生を敬う」とは師道を立てる意味である。

先生は師の座にあって「愛と理想」をもって導き生徒は先生を敬って進んで教え受け真剣に自分を磨く。ここに真の教育が行なわれるのである。

古人も「道の明らかならざるは師道の立たざるなり。」と言って、弟子がその師を尊ばないことが、教育の不徹底の原因であることを指摘している。師の座をあがめることは、真の学を成し生命ある創造的人格に至る道である。

2. 至誠勤勉

3. 質実剛健と続きます。

以上の三つの綱領を更に六つの心得として具体的に実践要目として掲げてあります。

このような資料がありながら、不勉強でただただ、恥じるのみです。

この事柄を機会あるごとにお話をしました。次のような反応がありました。

第一に、「尊親敬師」そんなことは学校で習っておらん。

或る先輩に聞いたが、習っていない、との回答があった。そんな事はありえない。

(学校だけが勉強の場ではない。先生だけが師ではない。生きている間は死ぬまでが、大自然を含めてすべての人からも教えをうけて生きることが勉強である。)

第二に、「親と先生を尊敬せよ」と書いてある。先輩を尊敬せよ、とは書いてないから、先輩を尊敬することはない。

(「尊親敬師」の師は学校で習った先生だけではなく先哲を含め、広い意味で目上の人、人格者などを尊敬することの広い意味である。)

第三に、「尊親敬師」は「知徳併進」の「徳」の中にはいっておるので、「知徳併進」があれば「尊親敬師」は必要ない。

(「徳」の範囲や意味が広く、曖昧になり、具体性がないので中学生から大学生までの学園では父兄も含め、学園の教学精神を社会の人々にも理解して頂く必要がある。)

第四に、教師が教壇に立って、自分を(私を)先生を尊敬せよ。とは言えない。

(自分から発言となくとも尊敬される教師であって欲しい。社会人としても。)

第五に、在校生をもつ卒業生も(子供と父親の関係)見たことも、聞いたこともない。

(パソコンで打ち出した教育方針を拝見して頂きたい、と進言しても全然反応がない。子供が「生徒手帳」を持っていることも、「尊親敬師」が書いてあることも、ご存知なかった様です。)

慙愧に耐えられません。卒業生の発言とも思いたくありません。学校の信頼をより上げようではありませんか。

「指導する方も」「される方も」「同窓会も」再度、原点に戻り「伝統」が単なる歴史が長いだけでなく「修道」の意味を考え直して「欠落しているものは何なのか」「皆で考え、実践しようではありませんか。」

「真の修道精神」とは何なのか。

藩校を誇り、長い歴史を誇り、東大に白本一の進学率を誇りにすることも、有名人を多くだすことも大切なことでしょう。学校の評価はすべての卒業生の言動によって評価されると思います。

むつかしい事柄でなく、「修道の卒業生は何か違う・どこか違う」「何か一味違う」「挨拶ができる」「節度がある」「マナーが良い」「礼儀正しい」すべて、日本一の前に、先ず、広島一を目途に、社会の人々から尊敬されるだけの人物を排出するのは「人を人として尊敬すること」その原点は「尊親敬師」の精神が言動に滲みでることではないでしょうか。

・或る雑誌に発表された言葉

修道には伝統がある (過去のこと)

広島学院には電灯がある (未来のこと)

(電灯には光があり、愛がある。思いやりがあること)

愛媛県松山市に愛光学園がある。この学校も広島学院と同じく進学校でクリスチヤンの学校であり、信条は世界的教養人としての「深い知性」と「高い徳性」を磨く学徒の集まり「愛情と尊敬」「勤勉と誠実」「忍耐と勇氣」が学徒の本介であると記されてあります。

我々は過去を学び尊親敬師を学び、未来に向かって前進しようではありませんか。

以上

特別寄稿

ねんりんピック2011（ふれあい）熊本に出場して
（生涯サッカーの現役として）

大内 晟（高校11回）

ねんりんピックは高齢者の健康・生きがいづくりと社会参加を目的に、旧厚生省の創立50周年を記念して1988年にスタートしました。厚生労働省と、開催地の都道府県、長寿社会開発センター等が主催して毎年開かれています。ねんりんピックの愛称で親しまれている「全国健康福祉祭」は60歳以上の人を中心とする各種スポーツ競技や美術展、文化イベントなどがある楽しい祭典です。

第24回全国健康福祉祭くまもと大会は平成23年10月15日(土)～18日(火)に開催され、「火の国に燃えろ！ねんりん 夢・未来」をテーマに総合開会式は熊本県民総合運動公園陸上競技場「KKWING」で常陸宮ご夫妻をお迎えして盛大に行われました。都道府県(47)と政令指定都市(19)から1万人の選手・役員が参加しました。

第24回全国健康福祉祭くまもと大会
ねんりんピック2011熊本
火の国に 燃えろ！ねんりん 夢・未来



常陸宮ご夫妻

タンク、ゴルフ、マラソン、弓道、剣道の10種目。

ふれあいスポーツ交流大会

グランドゴルフ、なぎなた、ウォークラリー、太極拳、ソフトバレーボール、サッカー、ダンススポーツ、ボウリングの8種目。

文化交流大会

囲碁、将棋、俳句、健康マージャンの4種目。

三交流大会は22種目あり、熊本県下の9市4町で開催されました。

総合開会式では南の沖縄県から北の北海道へ順に、しんがりは熊本県が入場行進しました。

メインアトラクションは

第1章「世代をつなぐやさしい風」

三代目による熊本県の代表的な民謡メドレーで踊りが披露されました。

ねんりんピックには三スポーツ交流大会があります。スポーツ交流大会

卓球、テニス、ソフトテニス、ソフトボール、ゲートボール、ベ

第2章「時空を超える美しい風」

多彩な熊本県の祭りが繰り広げられた。「八代妙見祭り」亀と蛇が合体した想像上の動物の亀蛇（きだ）は八代では通称ガメと言われており、この亀蛇が11月23日に市内や河原を練り歩く祭りです。

矢部八朔祭り 江戸時代中期から始まったとされる。

「八朔」とは旧暦8月1日のことをいい、田の神に感謝し、収穫の目安を立てる日とされている。呼び物はなんとと言っても巨大な造り物で、高さは2～3m、長さは7～8mあり、加藤清正と家来が登場したので、山都町の2009年の大造り物銅賞の虎（虎視眈眈）が出てきた。

玉名大俵まつりは平成9年から開始された「俵ころがし」です。レースは大俵（一般）が重さ1トン、横幅4m、直径2.5m。小学生、中学生、高校生、レディースの部は小俵が重さ200kg、横幅2.6m、直径1.6mです。俵を転がす距離は80mの直線コースでタイムを競います。歴史を伝える史跡「高瀬舟船着き場」に「俵ころがし」という石畳の坂道があり、米蔵から船着き場へ荷卸しをする際に米俵を転がしたことに、この祭りは由来している。

熊本工業高校のハイスクールマーチングバンド。全日本マーチングコンテスト高校以上の部で7回の金賞を受賞しており、華やかな音と技で会場を盛り上げました。

総合開会式が終了すると、サッカー関係者は主会場の大津町にバスで移動し、開始式に参加しました。式では特別表彰として、最高齢賞、高齢者賞、大津町特別賞が該当者に授与されます。大津町特別賞の選定基準は町のアイデアで32,000人目に戸籍登録された新生児（女）と同じ生年月日（8月3日）の人に与えられました。該当者は広島

県（脇）と島根県で、副賞として大津町無形民俗文化財「伝統工芸梅の造花」（時価2万円相当）が贈られました。このことは、熊本日日新聞にねんりんピックの話題の一つとして取り上げられました。



大津町特別賞

サッカーには56チーム、1,120人が参加しました。1グループ4チームで優勝を競いました。参加チームが4の倍数にならない場合は開催県のチーム数を増やします。今回は熊本県からは3チームの参加でした。入賞チームには立派なメダル（金、銀、銅）が全員に授与されます。最下位チームには何もありません。

修道出身者は、広島市は林孝治（高2回）、藪正悟（高17回）、清水孝明（高20回）、広島県は大内晟（高11回）、脇洋一（高16回）、静岡市は脇裕司（高21回）の6名でした。将来、脇兄弟の対決が実現するかも知れません。お兄ちゃんが勝てるか楽しみです。



藪・林・清水

大内・脇

戦績は下記の通りです。

Dグループは静岡市と兵庫県が共に勝点7で、得失点差で静岡市は2位でした。Gグループは広島市と埼玉県が共に勝点7で、得失点差で広島市は2位でした。Nグループでは広島県が7年振りに優勝しました。大津町は江戸時代には宿場町として栄え、第11代横綱不知火の出身地で、現代は熊本市のベットタウンとして、また本田工業の企業城下町として人口が増加しています。

阿蘇山脈の稜線に沿って10基の風力発電の風車が緩やかに回転しており、風の強い所だと想像されました。

大津町は「スポーツで町おこし」を推進してきたので、「スポーツの森大津」には総合体育館や大津町運動公園があり、多目的広場に2面、球技場、競技場合わせて4面の天然芝グラウンドがあります。JリーグやKリーグのチームが合宿に利用するそうです。大津高校のサッカー部も監督に帝京高校OBを招き、県下の強豪校になりました。大津高校からは巻誠一郎（ドイツワールドカップの日本代表）を筆頭に地元のロアッソ熊本等に数多くのJリーガーを輩出しています。

ねんりんピックでは、熊本市観光ガイドブック、観光文化施設割引クーポン、熊本グルメの決定版、味の名店（お得な特典付き）、ナイトマップ（街頭でのキャッチにご注意）等々いろいろな資料が配布されます。BSのTV番組の日本の城ミステリー紀行「熊本城」、蘇る桃山文化～熊本城本丸御殿復元等から熊本の味と熊本城の逸話を取りまとめてみました。

熊本の味と言えば馬刺しとからし蓮根が有名です。馬刺しは文禄・慶長の役の時、補給線を絶たれ、食料が底をついた加藤清正軍が止むを得ず軍馬を食したのに始まり、帰国後、清正が領地である肥後の国（熊本県）に広めたというのは俗説のようです。

馬肉を生で食べる習慣は熊本県の他、青森県や山形県、福島県（会津地方）、長野県、山梨県にあります。

からし蓮根は体が弱かった細川家の初代肥後藩主、細川忠利公に滋養を付けるために考案されたと伝えられ、レンコンの切り口が細川家の家紋「九曜の紋」に似ていることから作り方は門外不出とされました。明治維新までは庶民の口には入ることはなかったそうです。

大会後は熊本城を見学しました。中学の修学旅行（昭和30年6月）は修道と女学院の団体列車で北九州でしたが、水前寺公園のスイゼンジノリと城の急こう配な石垣（武者返し）しか記憶に残っていません。

城の逸話について話題をまとめてみました。昭和30年に熊本城跡が国の特別史跡に指定され、昭和35年、大、小天守閣復元、平成20年本丸御殿が落成しました。

Dグループ:北海道、富山県、兵庫県、静岡市

D	北海道	富山県	兵庫県	静岡市	勝点	得点	失点	得失点	順位
静岡市	1-0	1-0	1-1		7	3	1	2	2
兵庫県	3-0	4-0		1-1	7	8	1	7	1

Gグループ:福島県、埼玉県、広島市、福岡県

G	福島県	埼玉県	広島市	福岡県	勝点	得点	失点	得失点	順位
広島市	2-1	1-1		0-0	7	3	2	1	2
埼玉県	1-0		1-1	3-0	7	5	1	4	1

Nグループ:宮城県、東京都A、広島県、熊本県選抜

N	広島県	宮城県	東京A	熊本選	勝点	得点	失点	得失点	順位
広島県		3-1	3-2	1-1	7	7	4	3	1

本丸御殿の大広間の奥には最も格式の高い部屋（昭君之間）があり、床は一段高くなり鉤型なった格式の高い造り（鉤上段）になっています。清正が上に座り家臣と対面したとは考え難く、清正が自分より上の人を招き迎賓するための部屋（昭君之間）と考えられる。壁画に中国前漢時代の絶世の美女の王昭君が描かれていることから昭君之間と名付けられ、実は昭君之間＝將軍之間（？）を意味する暗号では無いかと言う説がある。將軍とは誰のことか、清正としては豊臣秀吉の子供秀頼に他ならない。豊臣から徳川の天下となり、もしもの時には秀頼を迎え入れるために、清正が用意した部屋だという。いざとなれば徳川家と一戦交えても豊臣家を守るという清正の忠誠心の表れとか。

テレビ局が特別許可を取って、地元のロッククライマー（阿南志喜氏）が20mの石垣（ビル6階に相当）を登るのに7分を要しており、石垣の反り返る上部、いわゆる「武者返し」は角度が70度で、ここからは振り落とされるような危険を感じたそうです。重い鎧兜を付け武器を持ってよじ登るのは不可能だろうと解説していました。

熊本城は加藤清正が7年を要して慶長12（1607）年に完成しています。蔚山龍城の経験から城内には深さ30m以上の井戸が120本あり、その内の17本が現存しています。これらの井戸は、飲料水確保と、築城のためのボーリング調査を兼ねていたそうです。加藤清正の死後は忠広が跡目を相続しましたが、当時の將軍、徳川家光と相対していた忠長と親しくしていたという理由で改易され、細川家が入城しました。

加藤清正は食料確保のために銀杏の木を植えた際、「将来この銀杏が天守の高さまで伸びた時兵乱が起きるだろう」と予言したと言われている。それから270年後まさに銀杏が大樹に成長した時、熊本城に災いが起きました。仕掛けた西郷隆盛の薩摩軍は約13,000名の兵、熊本城に司令部を置く政府軍は徴兵した農民を中心に3,500名の兵でした。熊本城は明治10（1877）年の西南戦争で天守閣などが焼失したものの、52日間

の籠城に耐え、難攻不落の堅固な造りを天下に知らしめたのです。

西郷軍が到着する5日前に、地元写真家の富重利平が第14連隊隊長補佐の乃木希典から依頼されて政府軍の記録として熊本城の写真が、当時日本では2台しかなかった野外用四切暗箱で撮影されました。そのガラス版ネガは熊本県立美術館に保存されています。熊本城が焼失したのは3日前であることから、西南戦争の研究を続ける地元の歴史作家の勇智之は官軍が自分で焼いた自称説を唱えています。熊本鎮台司令長官の谷干城（たてき）の作戦は熊本城の強みを生かし、徹底した全軍籠城でした。中国には「堅壁清野」という戦法があり、堅壁とは兵を守りに集中させるため、城内の不必要な物をあらかじめ取り除くことで、これにより怖くなった兵士が天守閣等に逃げ込めなくなった。

櫓の一部を取り壊して石垣の上に備え付けた新型の大砲で攻撃を開始した。石垣からの攻撃は射程が長く、薩摩軍は城に近づくことすらできなかった。加藤清正が造った難攻不落の熊本城は西郷隆盛の攻撃にも屈しなかった。「加藤清正と戦をしているみたいでなかなか勝は見えない」と隆盛が嘆いたそうです。

一方、西郷は熊本城を落とせないことを承知の上で戦ったという説もある。日本が近代化する中で士族の終焉を考えた西郷は死に場所を求めていたのではと言う。華々しく士族として武士としてこの世を去ることは、西郷隆盛は決して不遇の中で亡くなったとは思いませんね、と歴史作家の加来耕三氏は語っています。

帰りの新幹線のなかで熊本市が来春の4月1日に政令指定都市になることを知りました。翌日の新聞は、合併を促進するために人口70万人以上と条件を緩和していたが、100万人以上に戻されるので最後の政令指定都市（全国20番目）になると報道していました。熊本市は人口70万人以上の都市で全国唯一、阿蘇の湧水で水道資源を賄っているそうです。

来年のねんりんピックは宮城県で規模を縮小して開催されます。



フィナーレ 空を仰げ！風に乗れ！熊本の『夢・未来』

特 別 寄 稿

ロイヤル・サッカー東西大会に出場して

林 孝 治 (高校2回)

平成23年1月10日(土)に今年も胸をふくらませて、東京に向かいました。

国立競技場の夢を達成させて頂き誠に有難うございました。早くも5回目となりました。年輪を重ねてO-80となりました。前日までは雨模様でしたが開始時刻がせまるにつれて絶好のサッカー日和になりました。空は晴れ上がり、風もなく、ピッチは冬季にも拘わらず最高の芝生に仕上がっております。パウンドのボールも跳ね返らない位、厚みのある芝生でありました。

開催の主旨でスポーツジャーナリストの加川 浩様は次のように記されております。

充実期ベレのスーパーゴールも、19歳マラドーナの精妙なボールタッチもここで演じられた。

元日の天皇杯決勝、高校選手権大会では多くの好ゲームが観衆と感動を共にした。

大正13年(1924年)明治神宮外苑競技場としてスタートした国立競技場は83年間日本のサッカーのメッカだった。この競技場と同じ年に生まれた。

今もスポーツ記者を続ける小生にも、大切な仕事の間であると共に、少年期に明治神宮大会の決勝を戦った心の故郷でもある。その国立のピッチに世間で言う高齢者が参集し、試合を楽しむ。

将にサッカーニッポン、健康ニッポンに象徴ともいえる。

この催しが、永く続くことを願い、諸君の一蹴、一走に拍手を贈りたい。

恒例により大会開催の浅見会長の挨拶から始まり、元国際審判岡田正義様の準備体操がありました。

出場者120名が予め準備された、東西(赤軍・西軍)に分かれ11時15分キックオフから30分ゲームの5試合

が行われました。

ゲームは参加者のサッカー人生を今後も続けられるように、試合中の怪我予防のためスライディングタックルやショルダーチャージなどの、タフなプレーは禁止されております。因みに、いままで、救急車を呼ぶような怪我はでておりません。

昼間は、素晴らしい芝生で走り・蹴らせて頂き、夕刻より懇親会が行われ、おいしい食事を頂きながら今年の東日本の災害のこと、昔の全国大会の懐かしい話、なでしこの話、天皇杯・高校選手権の話に、暇がありませんでした。

来年も皆、元気で、お逢いすることを、誓いながら、解散しました。

修道OBの5名に、お逢うことができました。

紳士のスポーツであるサッカーを通じて、

ロイヤル(Loyal)

マナー(Manners)

ルール(Rule)

「忠実に・行儀よく・規則を守る」ことを「やって見せ」「やらせて見せ」て、後輩達に実戦で導き、世のため・人のためになる後継者を育て、平和で明るい日本・明るい地球をつくることの大きな目途に邁進することであります。

最後になりましたが、お世話をいただきました三菱東京UFG銀行畔柳総裁、東京サッカー協会浅見会長、東大LBの皆さま、その他多くの方々に深感すると共にご厚礼申し上げます。

国立の芝生の底まで冬晴れて



左から竹内民雄(10回) 高場利博(9回)
森田哲朗(9回) 林 孝治(3回)
坂井忠昭(14回)

学園だより

第64回 修道高等学校卒業式

平成24年3月3日(土)第64回修道高等学校卒業式が、総合体育館で執り行われました。

279名の卒業生を送り出し、そして新たに修道学園(中・高)同窓会に入会することとなりました。

修道学園(中・高)同窓会より卒業生全員へ「名前入りシャーボ」を卒業記念品として贈呈いたしました。

《高木(中・高)同窓会会長祝辞》

修道高等学校第64回卒業式に臨み、修道学園中・高同窓会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を述べさせていただきます。

皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。

本日でたく卒業された皆さんを、我が同窓会にお迎えましたことは、同窓生一同心からの喜びであります。

この度の栄えある卒業は、皆さんの日々たゆまぬ努力の結晶であることはもとより、これまで慈しみ、育てこられた保護者の皆様や校長先生をはじめ多くの教職員の方々の献身的なご指導によるものであることも忘れないでいただきたいと思えます。

ご存知のように同窓会は、同じ学園生活を送った人々が世代を超えて結びつき、会員相互の親睦と母校修道の発展を目的として日々活動を続けております。

3万1千余名にも及ぶ多くの同窓生は、政治、経済、文化、法曹、教育、医療等のあらゆる分野で活躍をされ、わが国はもとより広く国際社会において貢献をしておられます。

同窓会は、これらの同窓生が相集うための組織であり、その歴史は古く、昨年の8月で設立100周年を迎えました。今後皆さんは各界で活躍されることになるとは思いますが、どうか地元広島はもとより他の地域や職場の同窓生と、積極的な交流を図っていただくことを念じてやみません。

「吾が道、一以て之を貫く。夫子の道は、忠恕のみ。(わがみち、いつもこれをつらぬく。ふうしのみちは、ちゅうじょのみ。)」これは中国の思想家孔子の教えであります。その教えるところは、「わたしは終生一貫した、変わらぬ道を歩いてきた。」その一貫した道とは忠恕(ちゅうじょ)、すなわち真心をもってあらゆる事柄に対処していくという信念を表したものであります。これから出会う数多くの人との交流には、この言葉が教えるように、真心で接していくことが大切であると考えます。修道で生まれた相互の強い絆は、今後の人生において必ずや大きな支えになるものと確信いたします。この絆を礎に真心をもって、さらに交流の輪を広げていただき大成されますことを願います。

最後に、皆さんに先輩として、贈りたい言葉があります。それは“恥をかく勇氣”“失敗を怖れない勇氣”をもて、と云うことです。今日を境に皆さんは新しい世界に踏み出されます。今までは学校や保護者の方々に、束縛されながらも守られてきました。明日からは、自由な時間もふえ、自己責任の世界に入ります。

いろいろな経験をし、また困難にも直面すると思えます。その時に、決して逃げないで下さい。“逃げない勇氣、恥をかく勇氣”これこそ、次なる成長につながり、自分の殻を突き破ることになります。

これからが、人間形成の一番大切な時です。勉学だけでなく、人間として成長して下さい。校是にある「知徳併進 質実剛健」は修道生にとって一生のテーマであることを忘れないで下さい。

大いなる成長を期待しております。

皆さんの洋々たる前途を心からお祈りいたしますとともに、次代に寄与する有為な人材となられますことを切望して、私のお祝いの言葉といたします。

本日のご卒業、誠におめでとうございます。



連合会ニュース

乃木希典將軍書簡の取得、寄贈

修道学園同窓会事務局長 近川 俊 治

修道学園同窓会連合会は、乃木希典將軍から旧制修道中学校佐藤正総理にあてた書簡を取得しました。

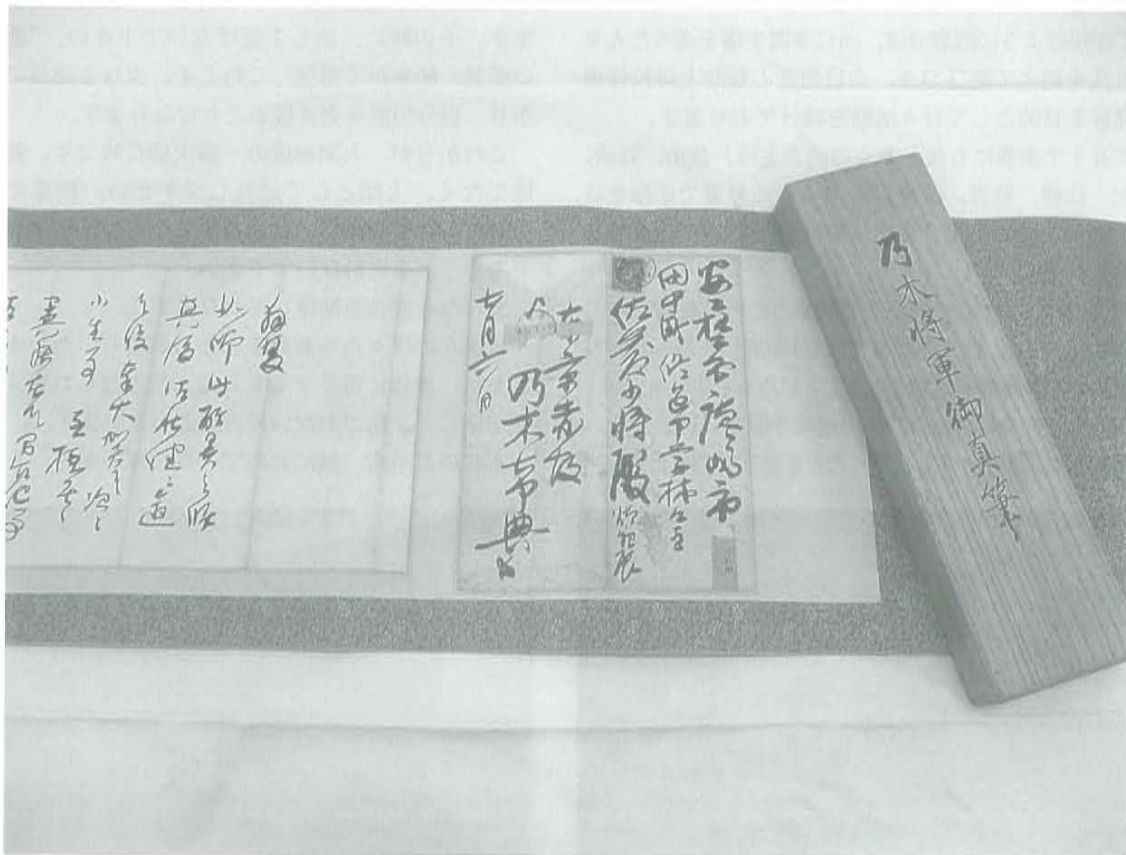
書簡は、毛筆で書かれており1910（明治43）年7月6日の消印があります。これは乃木將軍が殉死する2年前のものです。

書簡には、日露戦争で二人の息子が戦死した乃木家に対して、佐藤らから乃木に対し養子縁組の話があったようですが、西南戦争で軍旗を失ったことや日清・日露戦争で多くの兵士を死なせたことに対する自責の念が綴られており、「養子縁組はせず、乃木家は私一代で終わることを覚悟している」との心情が記されています。

佐藤正は、1849（嘉永2）年に広島市白島町に生まれ、8歳で浅野藩学問所に入学し、後に学問所の句読師になっております。33歳で東京鎮台歩兵第1連隊第3大隊長に就任しましたが、その時の連隊長が乃木希典でした。二人は親交を深め、西南戦争や日清戦争でも

共に戦っております。佐藤は日清戦争の牛荘城の戦いで左足を負傷し、陸軍少将となり退役しました。1896（明治29）年には第3代広島市長に就任しましたが、負傷した足の状態が思わしくなく着任はしていません。後に宮中顧問官、東亜同文会幹事長、愛国婦人会事務総長、芸備協会理事長や芸備鉄道会社創立委員長などを歴任しております。1905（明治38）年、財団法人修道中学校設立にあたって尽力し、竹屋村に校地を移転する際には、2,518坪の校地の半分を譲渡しております。1915（大正4）年に理事長に就任し、1920（大正9）年、72歳で逝去するまで修道中学校経営に傾注されました。

修道学園同窓会連合会は、修道に深くかかわりのある佐藤正にあてた書簡であるため、修道学園が保管・管理することが望ましいと判断し、2012年2月8日修道学園に寄贈いたしました。



支部だより

江能修友会

◎第18回総会と懇親会

開催日時：平成24年6月24日(日) 11:30から
(受付同 11:00から)

懇親会：12:00から

会場：国民宿舎 能美海上ロッジ

(江田島市能美町中町1265 TEL 0823-45-2335)

《お問い合わせ先》

江能修友会事務局(胡子 雅信)

携帯TEL 090-5379-1130

関東支部

◎平成24年度修道学園同窓会関東支部総会

開催日時：平成24年7月9日(月)

会場：東京ドームホテル「天空の間」

(東京都文京区後楽1-3-61 TEL (03)5805-2111)

《お問い合わせ先》

関東支部事務局(稲田 英一郎)

TEL 03-6682-1211

事務局だより

同窓会募金活動について

昨年11月に同窓生の皆様をお願いいたしました、修道学園所(仮称)復元事業にかかる寄付金募集につきましては、多くの同窓生の皆様にご賛同いただき、平成24年3月現在で約2,300万円のご寄付をいただいております。募集期間は平成24年9月30日までとなって

広島修道歯科医会

◎第49回広島修道歯科医会総会

開催日時：平成24年11月10日(土)午後4時から

会場：県民文化センター「鯉城会館」

(広島市中区大手町1-5-3 TEL (082)245-2322)

《お問い合わせ先》

広島修道歯科医会事務局(椿田 直也)

TEL 082-274-1616

近畿支部

◎平成24年度修道学園同窓会近畿支部総会・懇親会

開催日時：平成24年12月2日(日)午前11時から

(受付同10時30分から)

会場：ホテル大阪ベイタワー4階「金枝の間」

(大阪市港区弁天1-2-1(ORC200内) TEL(06)6577-1111)

《お問い合わせ先》

近畿支部事務局(齋本 隆司)

携帯TEL 090-9863-0335



(復元予想図)

おりますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いたします。

なお、復元工事は平成24年4月から開始し、平成26年8月に竣工する予定となっております。

事務局だより

平成24年度同窓大会開催一覽

◎広島修道大学大学院同窓大会

開催日：平成24年6月23日（土）予定
会場：ホテルJALシティ広島
（広島市中区上幟町7-14 TEL 082-223-2580）
《お問い合わせ先》
広島修道大学大学院同窓会事務局（石井健二郎）
TEL 0824-22-2171

◎修道学園（中・高）同窓大会

開催日時：平成24年9月29日（土）開始時間（未定）
会場：リーガロイヤルホテル広島
（広島市中区基町6-78 TEL 082-502-1121）
《お問い合わせ先》
修道学園（中・高）同窓会事務局
TEL 082-241-6686

◎第48回広島修道大学同窓大会

開催日時：平成24年11月3日（土）19：00から
会場：リーガロイヤルホテル広島
（広島市中区基町6-78 TEL 082-502-1121）
《お問い合わせ先》
広島修道大学同窓会事務局 TEL 082-830-1321

2011年秋の叙勲修道関係者

和田 世弘氏（高校4回）
現 大竹市教育委員会委員長
旭日双光章
地方教育行政功勞により受章された

長谷川 一彦氏（高校18回）
現 税理士法人長谷川会計代表社員
黄綬褒章
税理士功勞により受章された

広島市議会議長 就任（2011年5月17日）

木島 丘氏（高校4回）
現 第74代 広島市議会議長

広島県議会議長 就任（2011年5月18日）

林 正夫氏（高校11回）
現 第63代 広島県議会議長
学校法人修道学園 理事長

訃報

大田 哲哉氏（高校11回）

（修道学園（中・高）同窓会名誉会長・学校法人修道学園理事）
2011年11月7日 ご逝去 享年70歳
氏は1963年に広島電鉄㈱に入社され、1996年4月から2010年6月までの14年間社長を務められました。2001年4月から4年間広島経済同友会代表幹事を、また2007年11月から3年間広島商工会議所会頭を務められました。

この間、2005年4月からは学校法人修道学園理事（2011年11月まで）や修道学園（中・高）同窓会会長（2011年3月まで）に就任されました。

2011年6月には、旭日中綬章を受章されました。

河野 徳男氏（旧中34回）

（修道学園同窓会連合会及び修道学園（中・高）同窓会幹事）
2011年9月11日 ご逝去 享年86歳
氏は戦後バレーボール選手として活躍し、広島県体協理事長、専務理事、副会長を務められました。幅広い人脈を築き1990年に地方選出理事では初めて日本体育協会の国体委員長に就任。「時代に反応しなければ」と外国籍選手への門戸開放やスリム化など国体改革にまた、1994年広島で開催されたアジア大会招致にもご尽力されました。

新見 剛士氏（元修道高校教頭 在職期間：1947年4月1日～1987年3月31日）

2011年12月11日 ご逝去 享年84歳
戦争により1940年から1949年まで中断されていた臨海学校の復活に携われました。

また専門の柔道がGHQの占領政策により1951年まで禁止の間、サッカー班部長として、6度の全国優勝を成し遂げられた。柔道復活後は、定年までの35年間柔道班の部長、監督として一貫して柔道班の指導にあたり、中体連・高体連の要職をこなされる中、広島県チームで国体準優勝3度を成し遂げられました。戦後の時代と共に修道を創っていかれた先生でした。

田村 一郎氏（元教員 在職期間：1952年4月1日～1955年12月31日）

2012年1月1日 ご逝去 享年81歳

謹んで心よりご冥福をお祈りいたします。

会報誌へのご寄稿、支部・同期会などの近況報告につきましては、ご多忙にもかかわらずご協力いただき誠にありがとうございました。